

京都大学構内遺跡調査研究年報

2023年度

2024

京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター

京大文化遺産調査活用部門

京都大学構内遺跡調査研究年報

2023年度

2024

京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター

序

本年報は、文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センターの京大文化遺産調査活用部門がおこなった京都大学構内に残る遺跡の調査のうち、2023年度に整理の終了したものについて、その成果をまとめたものである。

第Ⅰ部で報告する2件の発掘調査のうち、医学部構内の調査は、2021年の12月から2022年の5月にかけて実施されたもので、その成果の概要は昨年度の年報で報告済みである。今回の報告では、整理時間の都合上、報告から漏れた縄文土器～古代までの遺構・遺物を報告している。これらも当地の土地利用を考える上で重要な資料である。病院構内の調査では、18世紀代の遺構・遺物とともに安定した遺物包含層の堆積を確認することができた。調査地点は病院構内の西南にあたるが、18世紀以降に本格的な開発が始まるという周辺の調査での調査成果を補強する成果を得ることができた。

第Ⅱ部の紀要は、「塩壺（しおつぼ）」と俗に呼ばれてきた鉢形土師器の論考の後半部分にあたる。資料を悉皆的に集成し、年代の変遷、分布、用途・機能など、考古学的に基礎的な分析をおこなっている。第Ⅰ部・第Ⅱ部ともにご覧いただき、ご批評・ご意見をいただければ幸甚である。

本学総合博物館と連携し、当部門の社会的発信事業の一つとして始めた研究成果の展示（「文化財発掘」）は、2023年3月～5月にかけて、「京都白川の巨大土石流」と題して第9回目を開催した。第10回の節目となる今回は、「比叡山麓の縄文世界」を3月6日～6月9日の会期で開催する。また、2021年度末に終了した「白川道」に係わる研究プロジェクトを引き継いで、2022年度からは、「白川道」に関する研究成果を基礎にして、「都市化」という観点より、地域の歴史的な推移や意義などについて明らかにする、新たな研究プロジェクトを始めている。その研究の一環として、2023年12月には北部構内で幕末土佐藩邸の堀跡の確認を目的とした試掘調査を実施した。今後もこうした部門の活動に、各方面からのご支援とご協力をお願いする次第である。

2024年3月

京都大学大学院文学研究科附属
文化遺産学・人文知連携センター長

磯貝 健一

例 言

- 1 本年報は、京都大学構内で2023年4月1日から2024年3月31日までに発掘、整理作業をおこなった埋蔵文化財調査と保存の報告、および京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター京大文化遺産調査活用部門における研究成果をまとめたものである。
- 2 国土座標にしたがって一辺50mの方形の地区割りをして、遺跡の位置を表示した。
- 3 層位と遺構の位置については、世界測地系国土座標平面直角座標系（第VI系）により表示した。
- 4 遺構の略号は、奈良文化財研究所の方式にしたがって、井戸：SE、土坑：SKのように表示し、各調査ごとに通し番号を1から付した。
- 5 遺物には、遺跡の調査名を示すローマ数字と、調査ごとの通し番号を1から付した。この遺物番号は、本文、実測図、写真を通じて表示を統一した。

I：京都大学北部構内BC33区の立合調査

II：京都大学医学部構内AM20区の発掘調査

III：京都大学病院構内AG11区の発掘調査

（例 I 1：京都大学北部構内BC33区立合調査出土遺物1番）

- 6 原則として、遺物の実測図は縮尺1/4、遺物の写真は約1/2に統一した。他の縮尺のものは、それぞれに縮尺を明記した。
- 7 参考文献は、本文中に〔著者名 発表年〕の形式で表わし、巻末に一括した。
- 8 古代・中世土師器の型式分類は、とくにことわりがない場合、『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ』（1981年）にしたがっている。
- 9 本文の執筆者名は各章の初めに列記した。また、遺構・遺物の撮影は原則として、それぞれ報告者が担当した。
- 10 編集は、千葉豊が担当し、伊藤淳史、笹川尚紀、磯谷敦子、柴垣理恵子、長尾玲が協力した。
- 11 2023年度の京大文化遺産調査活用部門内の組織は以下の通りである。

部 門 長：吉川 真司（文学研究科教授）

教 員：千葉 豊、伊藤 淳史、笹川 尚紀

教務補佐員：磯谷 敦子、長尾 玲、柴垣 理恵子

事務補佐員：高山 典子（2023年10月31日まで）

目 次

第 I 部 2023年度京都大学構内遺跡発掘調査報告

第 1 章 2023年度京都大学構内遺跡調査の概要	1
1 調査の概要	1
2 調査の成果	1
3 北部構内 B C 33区の立合調査	2
第 2 章 京都大学医学部構内 AM20区の発掘調査 II	5
1 調査の概要	5
2 縄文時代の遺構と遺物	6
3 弥生時代～古代の土器	10
第 3 章 京都大学病院構内 A G 11区の発掘調査	17
1 調査の概要	17
2 層 位	18
3 遺 構	20
4 遺 物	22
5 小 結	24
参考文献	27
京都大学構内遺跡のおもな調査	30
報告書抄録	41

第Ⅱ部 京都大学大学院文学研究科附属
文化遺産学・人文知連携センター
京大文化遺産調査活用部門紀要Ⅴ

「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（下）

- 5 資料の集成と検討(2)－その他の地域－……………45
- 6 製品の系譜と機能について……………53
- 7 まとめと課題……………57

図 版…………… 卷末

図 版 目 次

- 図版 1 京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点
図版 2 京都大学医学部構内AM20区
縄文土器
図版 3 京都大学医学部構内AM20区
弥生土器, 須恵器
図版 4 京都大学病院構内AG11区
1 表土除去後全景(東から)
2 黒褐色土除去後全景(東から)
図版 5 京都大学病院構内AG11区
1 淡褐色土除去後全景(東から)
2 集石S X 1検出(南から)
3 調査区東北角砂礫層落ち込み確認状況

挿 図 目 次

京都大学北部構内BC33区の立合調査

- 図 1 調査区の位置……………3
図 2 立合調査の状況……………3
図 3 調査地点層序模式図……………4
図 4 北部構内BC33区立合調査出土土器……………4
京都大学医学部構内AM20区の発掘調査
図 5 調査地点の位置……………5
図 6 縄文土器(1)……………7
図 7 縄文土器(2)……………8
図 8 弥生時代の土器……………11

- 図 9 製塩土器・土師器・緑釉陶器・灰
釉陶器……………12

- 図10 須恵器(1)……………13
図11 須恵器(2)……………14

京都大学病院構内AG11区の発掘調査

- 図12 調査地点の位置……………17
図13 調査区北壁の層位……………19
図14 調査区検出の遺構……………21
図15 淡褐色土出土遺物(1)……………23
図16 淡褐色土出土遺物(2)……………25

「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検
討（下）

図17 対象資料207点が出土した遺構の
時期……………46

図18 対象資料の出土地点……………47

図19 厚手鉢形土器の変遷（鴨東地域北
部以外・その1）……………50

図20 厚手鉢形土器の変遷（鴨東地域北
部以外・その2）……………51

図21 時期別にみた口径の分布……………52

図22 平等院庭園阿字池西岸出土資料
……………53

図23 先行する時期の遺構出土類似資料
……………54

図24 厚手鉢形土器底部の輪状圧痕と人
面墨書土器底部の凹形成型痕…55

表 目 次

表1 京都大学構内遺跡のおもな調査
……………30

表2 鴨東地域北半における厚手鉢形土
器報告資料一覧……………60

第 I 部 2023年度京都大学構内遺跡発掘調査報告

第 1 章 2023年度京都大学構内遺跡調査の概要

第 2 章 京都大学医学部構内 AM20区の発掘調査

第 3 章 京都大学病院構内 AG11区の発掘調査

第1章 2023年度京都大学構内遺跡調査の概要

千葉 豊 伊藤淳史

1 調査の概要

京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター京大文化遺産調査活用部門では、吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物新営など掘削をとまなう工事に際し、予定地の埋蔵文化財調査を、既知の遺跡との関係や過去の調査結果に照らして、発掘・試掘・立合にわけて実施してきた。2023年度には、以下のように発掘調査1件、試掘調査1件、立合調査1件、資料整理1件をおこなった。また、前年度調査で報告できなかった立合調査3件も合わせて報告する（括弧内は、図版1および表1の地点番号）。

（2022年度）

- 立合調査 医学部構内がん免疫総合研究センター新営外構工事（医学部構内AM19区）
（第1章，図版1－512）
吉田南構内基幹・環境整備（電気設備）工事（吉田南構内AN21区）
（第1章，図版1－513）
北部構内農学部総合館 Mobil 新設工事（北部構内BC33区） （第1章，図版1－514）

（2023年度）

- 発掘調査 病院構内基幹・環境整備（屋外排水設備）（病院構内AG11区） （第3章，図版1－515）
試掘調査 科学研究費補助金による学術調査（北部構内BC28区） （第1章，図版1－516）
立合調査 病院構内基幹・環境整備（屋外排水設備）（病院構内AF12区） （第1章，図版1－517）
資料整理 医学部構内がん免疫総合研究センター新営（医学部構内AM20区）
（第2章，図版1－505）

2 調査の成果

以上のうち、2023年度に整理を終えたものについて、成果を略述する。なお、病院構内AG11区については第3章で詳述しているので参照されたい。また、第2章の医学部構内AM20区については、昨年度報告できなかった古代以前の遺物について整理した結果を追加報告するものであり、調査の成果については2021・2022年度の年報を参照されたい。

病院構内AG11区の発掘調査 調査地点は、聖護院川原町遺跡に含まれ、西方の鴨川まで150m程度の位置にある。近年、病院西構内でも発掘調査が進み、近世遺跡のひろがり確認されつつあるなかで、今回は最も西寄りの位置を調査したことになり、遺跡の遺

存状況や内容が注目される場所であった。

調査の結果は、近世後半期の遺物包含層2層（黒褐色土および淡褐色土）の厚い堆積が確認されるとともに、基盤の砂礫層上面では、淡褐色土を埋土とする複数の南北溝を検出することができた。調査地東方一帯で実施されてきた既往の調査成果と、ほとんど相違しない状況であり、近世遺跡のひろがりや鴨川にほど近い地点まで良好な状態で及んでいることが確認できたといえる。今後、鴨川沿いの一帯が近世～近代にかけてどのような開発過程を経ていったのか、発掘成果をもとに具体的に復元していく作業が課題となろう。

北部構内B C 28区の試掘調査 日本学術振興会より交付された科学研究費補助金基盤研究(C)22K00985「都市化とは何かー歴史都市京都近郊における長期的検証ー」（代表・伊藤淳史）により、近世末～近代にかけてのキャンパス一帯の都市化の状況を検証する活動の一環として、12月18～20日に試掘調査を実施したものである。具体的には、昨年度2月に天理大学文学部の協力を得て遺跡の探査をおこなった理学部6号館西側の緑地において、探査の反応が得られた位置に2×5mのトレンチを設定し、土佐藩白川邸に関連する遺構の存否確認を主目的に調査した。これらの成果については、2024年度作成予定の研究報告書においてまとめて報告の予定である。

立合調査の成果 北部構内B C 33区については、昨年度に未報告であったものである。平安時代の遺物や堆積層が良好に確認され、次節に詳報している。また本年度末には、病院構内や本部構内で大規模な立合が予定されているが、それらは来年度の年報に報告を繰り越すことになる。

3 北部構内B C 33区の立合調査

位置と環境 調査地点は北部構内の東半、農学部構内入場門を入ってすぐの場所に位置する（図版1-514、図1）。一帯では、これまで大規模な発掘調査は実施されていないものの、道路上を中心に工事ともなう立合調査がたびたび実施されており、縄文時代や古代を中心とする遺構・遺物の確認が報告されてきた。その成果の一端は、今回調査地の西方50mあまりの450地点で実施された2016年度の立合調査による円筒埴輪のまとまった出土報告とあわせて、紹介しているところである〔伊藤・富井2018〕。また、一帯は北白川追分町縄文遺跡として知られる空間であり、調査地東側の理学部植物園内では、縄文後期の甕棺・配石墓群が見つまっている〔中村徹1974b〕。

北部構内B C33区の立合調査

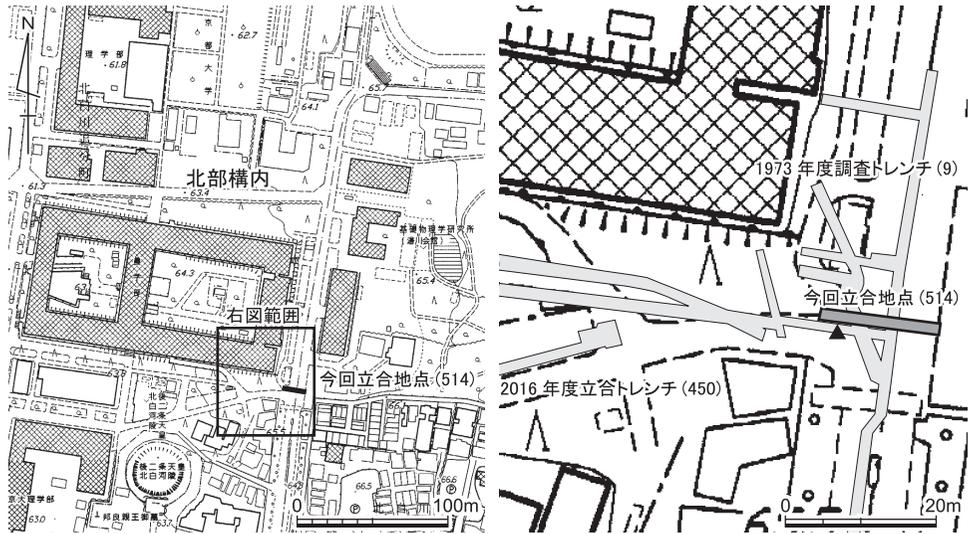


図1 調査地点の位置 (左：1/5000, 右：1/1000)

経緯と経過 今回は、この地に光ファイバーケーブル敷設にともなう管路掘削が計画された。東西方向に幅60cmで長さ20m程度、掘削深1mまでという小規模な工事であるが、上記したような既往の成果を考慮し、掘削時に立合いながら遺存状況を確認し、遺構・遺物の発見に備えることとした。調査は2022年11月24日～26日に実施した。

結果、調査地の東半は既存の管路等で攪乱されていたが、西半部分は近世以前の堆積層が良好に遺存していた。このため、掘削後に壁面を精査して層序の良く残る北壁側で記録を作成し、遺物を回収した(図2)。



1. 調査地西半掘削状況 (東南から)

2. 北壁の層序 (→が土器出土箇所)

図2 立合調査の状況

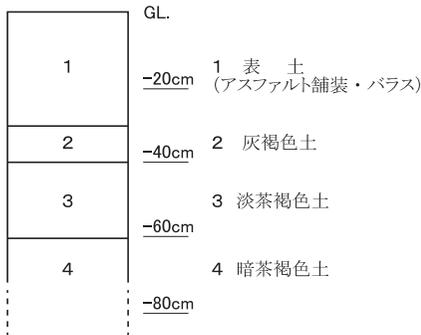


図3 調査地点層序模式図 1/20

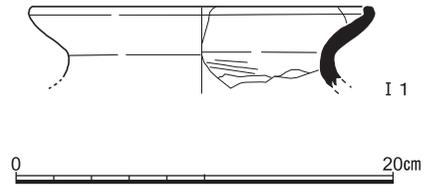


図4 北部構内B C 33区立合調査出土土器

調査の成果 層序を柱状図で示す(図3)。表土下に薄く灰褐色土(第2層)が堆積している。近世～近代の大学設置以前までの耕作土層である。本来はもう少し層厚があったはずだが、削平を被っているとみられる。以下、粗砂質の淡茶褐色土(第3層)、暗茶褐色土(第4層)と堆積している。掘削は現地地表下80cm程度までの暗茶褐色土中で止まったため、これ以下の堆積は不明である。淡茶褐色土中には土師器の微細片が包含され、時期を同定できるものはなかったものの、中世の遺物包含層だろう。暗茶褐色土からは、壁面からおおぶりの土器片が回収できた(図4)。I 1は平安時代中期に比定される甕形土器口縁部片で、口径の1/8程度が残存し、外面は全面煤が付着し黒変している。暗茶褐色土は、その時期を中心とする遺物包含層とみて良かろう。なお、遺構の存在を示すような落ち込みなどの痕跡は、調査範囲の壁面からは把握されなかった。

小 結 今回は範囲が狭小であり、甕形土器片1点のみの回収にとどまったが、1973年度の調査時には、平安時代中～後期の土師器や瓦類が多数出土している〔伊藤・富井2018 pp.50-60〕。こうした周辺での成果も勘案すると、古代の遺跡が良好な状態で一帯にひろがっていることは確実とみられ、今後も慎重な対応と配慮が必要である。

第2章 京都大学医学部構内AM20区の発掘調査Ⅱ

千葉 豊 伊藤淳史 笹川尚紀

1 調査の概要

本調査区は、京都大学医学部構内の南東隅に位置し、吉田橋町遺跡に含まれる（図版1-505, 図5）。ここに、がん免疫総合研究センターの新営工事が計画されたため、発掘調査を実施した。調査面積は、約1400㎡、調査期間は、2021年12月13日から2022年5月6日までである。発掘調査の結果、縄文時代の自然流路や中世の土器溜・井戸、中世から近世前半にかけての土取り穴、近世後半から近代の溝・井戸などの遺構が検出された。それらのうち、土取り穴からは、古代の土馬、鋳型や轆の羽口など鋳造に関するもの、近世初頭の黒織部梅鉢文沓茶碗といった特徴的な遺物がみつまっている。発掘調査の成果は、2021・2022年度の年報の第2章において、すでにまとめられている。けれども、諸般の事情により、めぼしい遺物のすべてにわたって吟味することが叶わなかった。よって、ここに、それらを取りあげて、いろいろと検討した結果を報告していくことにしたい。

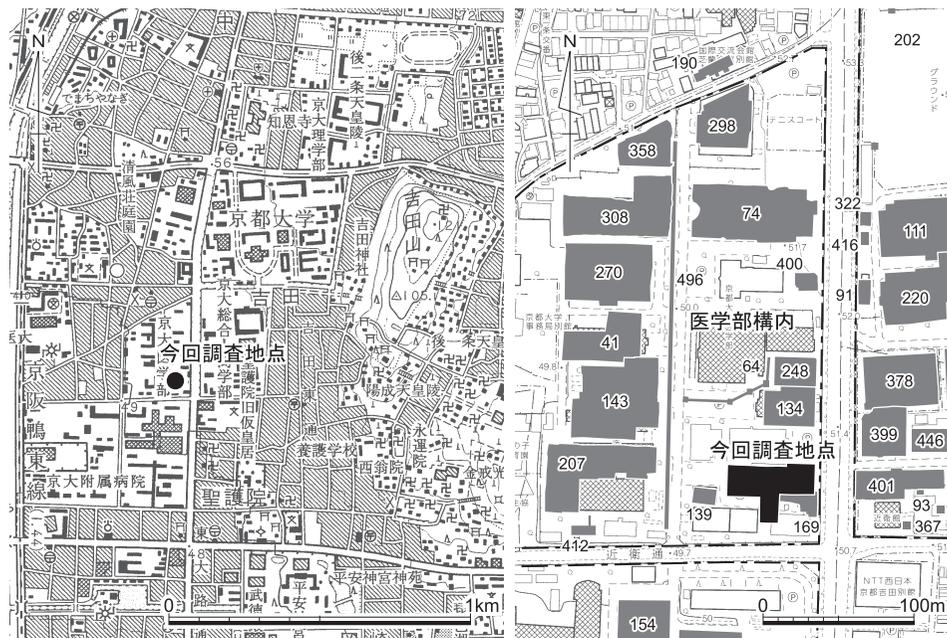


図5 調査地点の位置（左1/25000, 右1/5000）

2 縄文時代の遺構と遺物

前年度の報告で説明されているように、縄文時代に形成されたと考えられる自然流路(S R 2・S R 3)が調査区の西辺で検出された。S R 2は、幅が0.6～1.1m前後、深さ0.6mほどの小流路で、走向は北西から南東方向である。白色粗砂で埋まっていることから、白川系の流路と判断できる。S R 3は、幅が0.7m前後で、S R 2と直交するように、北東—南西へ伸びる。S R 2から分岐した小流路と考えられている。S R 2・S R 3は黄灰色シルトを切って形成されている。この黄灰色シルトは医学部構内から病院構内の東半に南北に帯状に分布しており、中世以降におこなわれた土取りの対象となった堆積物である。

縄文時代の遺物はS R 2・S R 3から出土したものと、歴史時代に形成された包含層から出土したものに大別できる。いずれも縄文土器で、S R 2・S R 3出土土器も器面が摩滅しているものもあり、プライマリーな状態を保って出土しているとは言いがたい。

S R 2出土遺物 (Ⅱ 1～Ⅱ 19) Ⅱ 1～Ⅱ 3は有文の口縁部。Ⅱ 1は口縁部からやや下がった位置に沈線を横走させ、R L縄文を施している。口縁端部は内側へやや湾曲し、丸くおさめている。Ⅱ 2は外傾しながら立ち上がる口縁部資料。口縁端部を内外に肥厚させる。口唇上に1条、口縁部直下に3条の沈線が横走し、3条沈線の下端から、やはり3条1組の沈線が垂下している。劣化しておりはっきりしないが、縄文施文はないようである。Ⅱ 3は口縁端部を欠損している。1条の沈線を横走させて口縁部と頸部を区分している。口縁部をめぐる沈線はクランク状に上へ折れ曲がって、口縁端部へと抜けている。

Ⅱ 4～Ⅱ 9は有文の頸胴部資料。Ⅱ 4は3条以上の沈線束で、沈線の末端を入り組ませながら、横位に展開する曲線文様を描いている。L R縄文を充填している。Ⅱ 5は頸部で条線文を垂下させている。Ⅱ 6は頸胴部の境に沈線を1条めぐらして区画線とし、胴部に多条沈線を縦位に施している。Ⅱ 7は胴部片で、3条1組の沈線が垂下し、それを横につなげる沈線がみえている。Ⅱ 8は頸胴部の境に沈線を1条めぐらして区画線としている。頸部は無文のようで、磨いて仕上げている。Ⅱ 9は胴部片で、劣化によりはっきりしないが、L R縄文を施文しているようである。

Ⅱ 10～Ⅱ 13は無文の口縁部、Ⅱ 14～Ⅱ 18は無文の頸胴部資料。Ⅱ 10は口縁部が内側へ折れ曲がる。Ⅱ 11は口縁部が肥厚する。角閃石を胎土に含み、暗褐色を呈する。

Ⅱ 19は、平底の底部がいったん立ち上がってから外傾する胴下部へと続く。底部はほとんど残存しないが、縄代になる可能性のある圧痕が認められる。

縄文時代の遺構と遺物

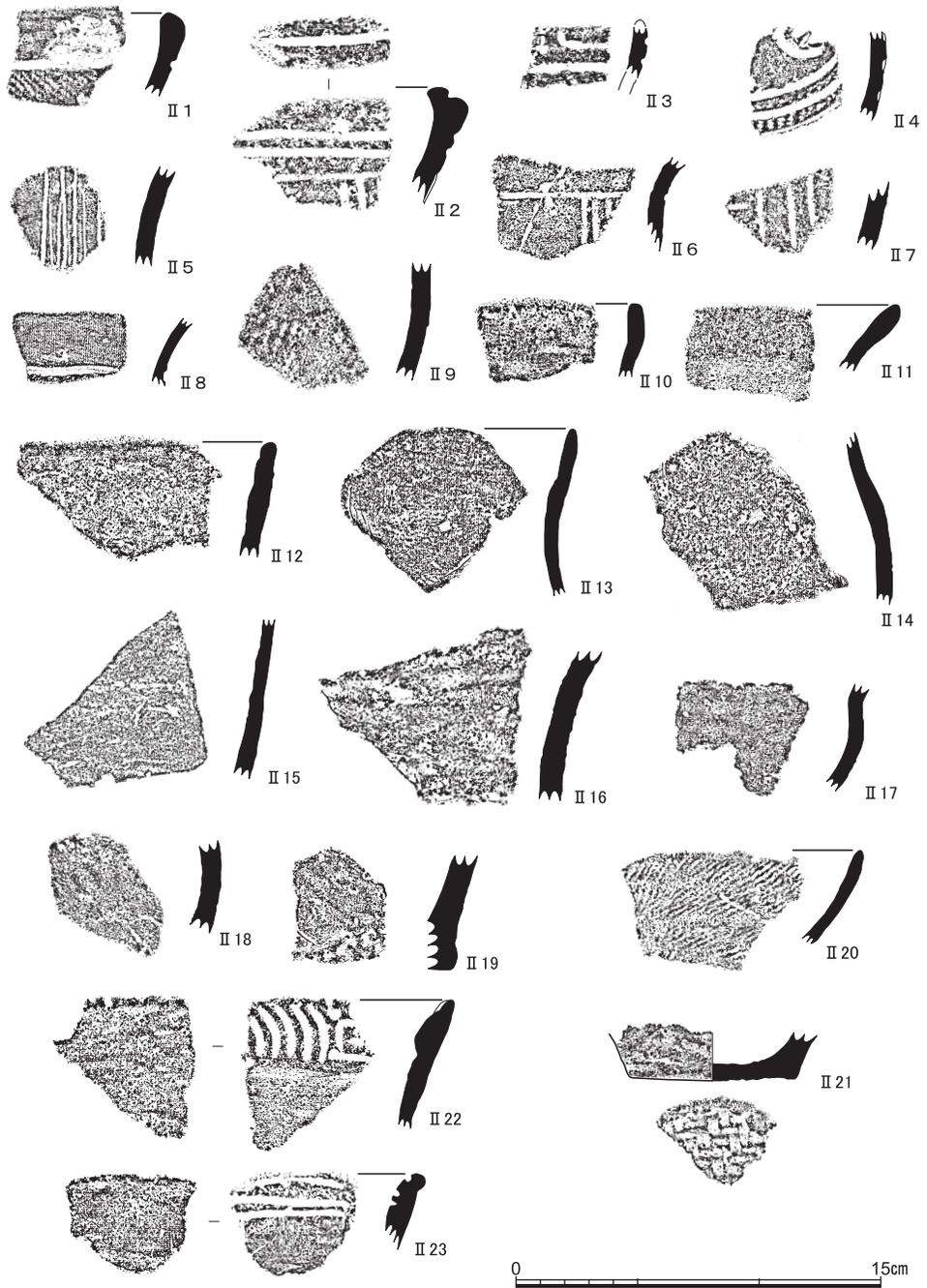


図6 縄文土器(1) 縮尺1/3

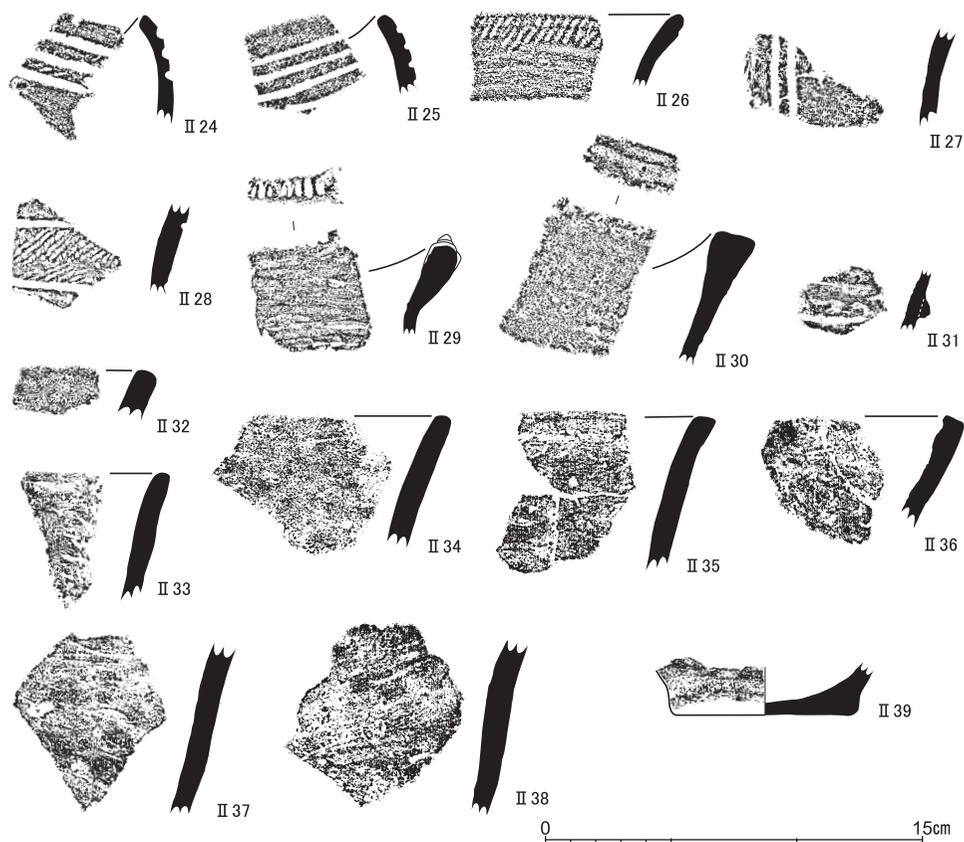


図7 縄文土器(2) 縮尺1/3

型式の判別できる資料は、Ⅱ1が後期初頭の中津式、Ⅱ2は後期初頭～前葉の福田K2式～四ツ池式、Ⅱ3～Ⅱ7は後期前葉の北白川上層式1期～2期に比定できる。

SR3出土遺物(Ⅱ20・Ⅱ21) やや内湾しながら立ち上がる浅鉢。口縁部から体部に、LR縄文を幅広く施文している。Ⅱ21は網代底の底部。網代は幅4mmの扁平材による2本超え2本潜り1本送りである。Ⅱ20・Ⅱ21ともに、北白川上層式の時期であろう。

歴史時代包含層出土遺物(Ⅱ22～Ⅱ39) Ⅱ22・Ⅱ23は口縁部の内面に文様を描く縁帯文土器。Ⅱ22は内面を肥厚させて、主文様として弧線文を配して、その間を長方形の区画文でつないでいる。Ⅱ23は肥厚させずに3条の沈線を横走させている。Ⅱ24・Ⅱ25は口縁部が内湾する波状口縁深鉢の口縁部とみられる。Ⅱ24は口縁端部を面取りしている。3条1組の沈線をめぐらせてLR縄文を充填している。Ⅱ25は口縁部外面に3条1組の沈線を施して、LR縄文を充填している。沈線束の下位には、さらに断続的な沈線がめぐって

いる。Ⅱ26は口縁部外面がわずかに肥厚して、そこにLR縄文を施している。角閃石を胎土に含み、暗褐色を呈する。Ⅱ27は頸部で、3条の沈線が垂下する。Ⅱ28は上下を沈線で区画したなかに、LR縄文を充填している。Ⅱ29は頸部がくびれる深鉢で、口縁端部に縦方向の刻みを施しており、向かって右端に向かって口縁部が内外に肥厚していくので、突起をもっていたと考えられる。Ⅱ30は頸部が外反する波状口縁の深鉢で、内外に肥厚する口縁端部を浅い凹線がめぐっている。Ⅱ31は凸帯文土器。胴部資料で、断面三角形の凸帯を貼り付けて、D字状の刻みを施している。

Ⅱ32～Ⅱ38は無文土器で、Ⅱ32～Ⅱ36は口縁部、Ⅱ37・Ⅱ38は胴部資料。Ⅱ39は直径7.5cmの平底の底部。いったん立ち上がったあと、外へ向かって開いている。

歴史時代の包含層から出土した土器は、Ⅱ31が晩期末の長原式に比定できるが、それ以外で型が比定できるのは後期前葉～中葉の土器である。Ⅱ29・Ⅱ30は縁帯文成立期、Ⅱ22・Ⅱ27は北白川上層式1期、Ⅱ23・Ⅱ26・Ⅱ28は北白川上層式2期、Ⅱ24・Ⅱ25は北白川上層式3期に比定できる。

小 括 今回の調査で出土した縄文土器は、1点出土した晩期末の土器を除くと、縄文時代の流路より出土した土器も歴史時代の包含層に混在していた土器も、後期前葉～中葉の北白川上層式を中心とした時期のものが主体を占めていた。先史時代の医学部構内から病院構内一帯は、高野川系流路による砂礫が基盤層を形成するとともに、白川扇状地の末端にあたり、白川系流路による堆積物が交錯する複雑な堆積環境を示している。白川系自然流路SR2・SR3のベース面となっている黄灰色シルトは高野川系流路によって形成された南北に伸びる凹地が高野川系流路の西への移動にともなって凹地内に粘土やシルトが堆積して形成されたと考えられ、その堆積物の上部の年代は約6300年前（縄文時代前期前半）とされている〔清水1991〕。

今回みつかった黄灰色シルトを切る白川系の流路は、病院構内155・191・278地点など周辺地区の過去の調査でも複数の地点で見つまっている。これらの流路内から出土している土器は、早期・前期といった古い時期の遺物も含むものの主体は北白川上層式（1期～3期）で、それ以降の時期のものを含まないため、流路の形成時期を後期前葉～中葉ごろに考えてよいであろう。今回の出土状況同様、出土土器の大半は二次的な移動を受けていると考えられるので、縄文人の活動実態を直接反映しているわけではない。ただし、流路の肩部に遺棄した状態でみつまっているものもあるので〔千葉1991〕、低地部における当時の人間活動に注意を払って調査を進める必要がある。

3 弥生時代～古代の土器

弥生時代以降平安時代までの資料は、すべて本来の時期の遺構にともなうものではなく、中世以降の土取り穴埋土や包含層への混入出土である。ただし、遺存の良さは時期により若干の違いも看取される。以下、図示可能な主要なものについて、おおむね時代と種類にわけて紹介しておく。

弥生時代の土器（Ⅱ40～Ⅱ50） 前～中期の破片も散見されるが、遺存の良いものは後期後半～終末期（庄内式併行期）ころに目立っている。

Ⅱ40は斜め上方に直線的に開く口縁部で、凹線文が施されていたかとみられる凹凸がめぐるが、全面が磨滅しており詳細ははっきりしない。中期後半の可能性ある資料としておく。Ⅱ41は広口壺の口縁～胴部上半にかけてで、複数の破片がある。胴部は球状に強く張る形態になるとみられ、そこから外反する口縁部が積み上げられる。特徴から後期後葉だろう。遺存も良く、胴部外面は全面篋磨きされている。Ⅱ42も同時期ころの壺の頸部付近とみられるが、やや口縁にかけての外反がゆるやかである。遺存は悪く器表面の荒れが著しい。Ⅱ43は壺の頸部から水平に近く屈曲する口縁部とみられ、器壁は厚い。擬凹線を施す端面に縦位の棒状浮文を飾るが、ほぼ剥落している。水平に移行する屈曲部上面にも擬凹線が施されており、そこから頸部側へは弱く内彎気味となる。内面側のみ全面に、赤彩が剥落したような状況が看取される。尾張地域で弥生時終末期ころにパレススタイル壺と呼称されている壺形土器の口縁～頸部に相当する器形の特徴を備えており、搬入品の可能性が高い。Ⅱ44は後期の甕の底部で、外面は叩きが螺旋状にめぐる。Ⅱ45は多条の細い沈線が施される胴部片。前期末～中期初頭の壺である。Ⅱ46は櫛描の流水文らしきモチーフの一部が残る小片。中期前葉ころの壺だろう。Ⅱ47は、外面に櫛描文を施す厚手の口縁部で、器表面が荒れており鮮明ではないが、上段に直線文、下段に波長の短い波状文が重ねられる。鈍角に屈曲して斜め上方に立ち上がる器形で、終末期ころの外面を加飾した二重口縁壺ではないかと思われる。Ⅱ48は無文で全面に篋磨きがされる胴部片。遺存は良い。Ⅱ41やⅡ42のような後期壺の胴部と思われる。Ⅱ49は櫛描文を施す壺胴部片。直線文の間に繊細な右下がり斜位の櫛歯刺突が施される。終末期ころの近江～東海地方に卓越するモチーフであろう。Ⅱ50は小さな平坦面をもつ底部。やはり終末期ころの小型壺の底部であろう。

古代の製塩土器・土師器（Ⅱ51～Ⅱ61） Ⅱ51～Ⅱ55は奈良時代の製塩土器口縁部で、わずかに内彎する形態をとる。砂粒を多量に含み、きわめて厚手である。総じて遺存は良

弥生時代～古代の土器

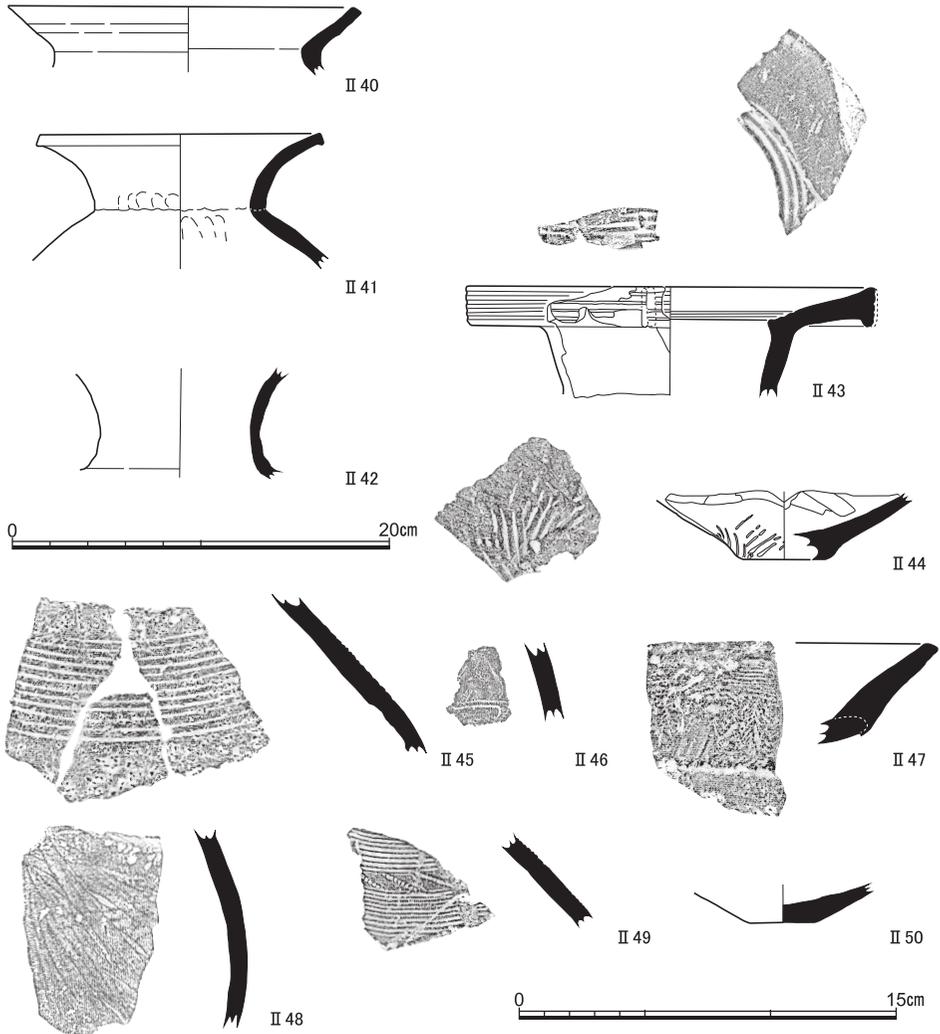


図8 弥生時代の土器 II 40～II 44：縮尺1/4，II 45～II 50：縮尺1/3

く、II 51は桃白色を、ほかは濃い赤褐色を呈する。

II 56～II 60は甕の口縁部。さまざまな口縁形状が認められるが、短く外反する形状のII 57、口唇部が短く内側に巻き込む形状のII 59は平安時代の、ほかはそれ以前の飛鳥～奈良時代のものであろう。II 58の口縁部は内彎気味に立ち上がる形状で、鏝状に近く外反する口縁部のII 60とともに、長胴を呈するものであろう。

II 61は奈良時代の杯口縁部で、口唇部は短く内側に巻き込む。II 62は同じ時期ころの高台をもつ杯B。両者とも赤褐色の精良な胎土をもつが、残存範囲に暗文は観察できない。

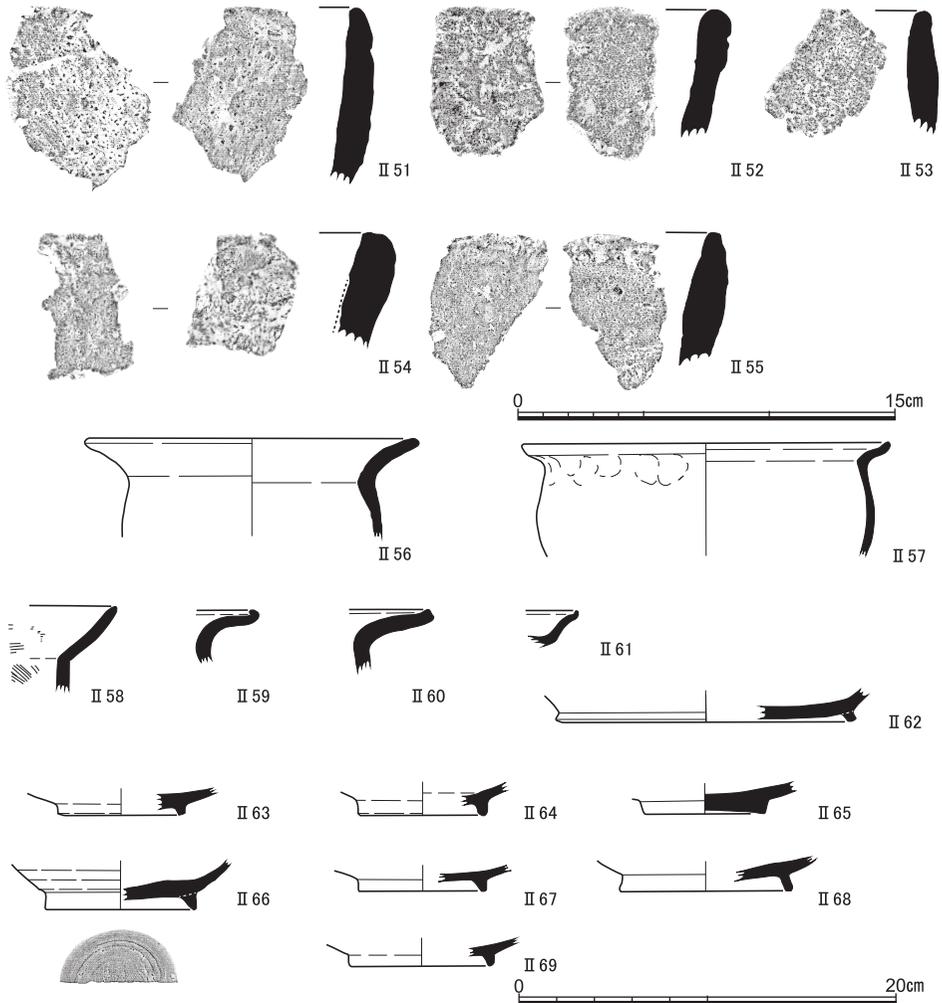


図9 製塩土器 (II 51~II 55)・土師器 (II 56~II 62)・緑釉陶器 (II 63~II 65)・灰釉陶器 (II 66~II 69) II 51~II 55: 縮尺1/3, II 56~II 69: 縮尺1/4

緑釉陶器・灰釉陶器 (II 63~II 69) II 63~II 65は緑釉陶器の底部。いずれも軟質の焼成で淡緑色。II 63は削り出し, II 64は貼付の高台をもつ。II 65は削りにより円盤状を呈する。II 66~II 69は灰釉陶器の底部。いずれも貼付による高台をもつ。断面三角形の丈高なものII 66から短く三日月状に内彎気味のものII 69まで, 各種がある。以上の緑釉・灰釉陶器は平安時代中~後期の製品であろう。

須恵器 (II 70~II 109) 古墳~平安時代にいたる各時期のものが認められる。

II 70は口縁~胴部下半までの1/4ほどが遺存する甕の大破片。頸部から短く立ち上がる

弥生時代～古代の土器

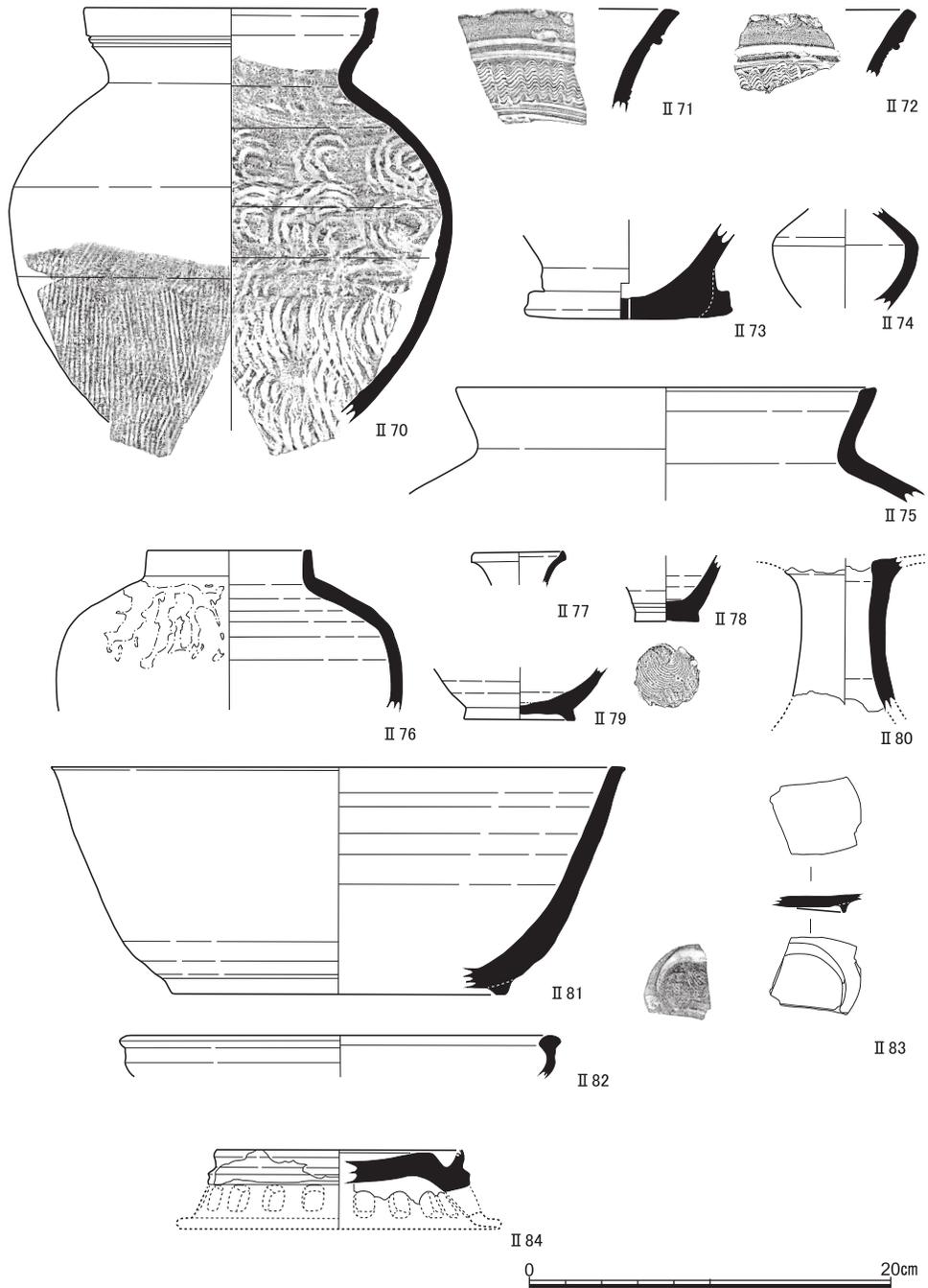


図10 須恵器(1)

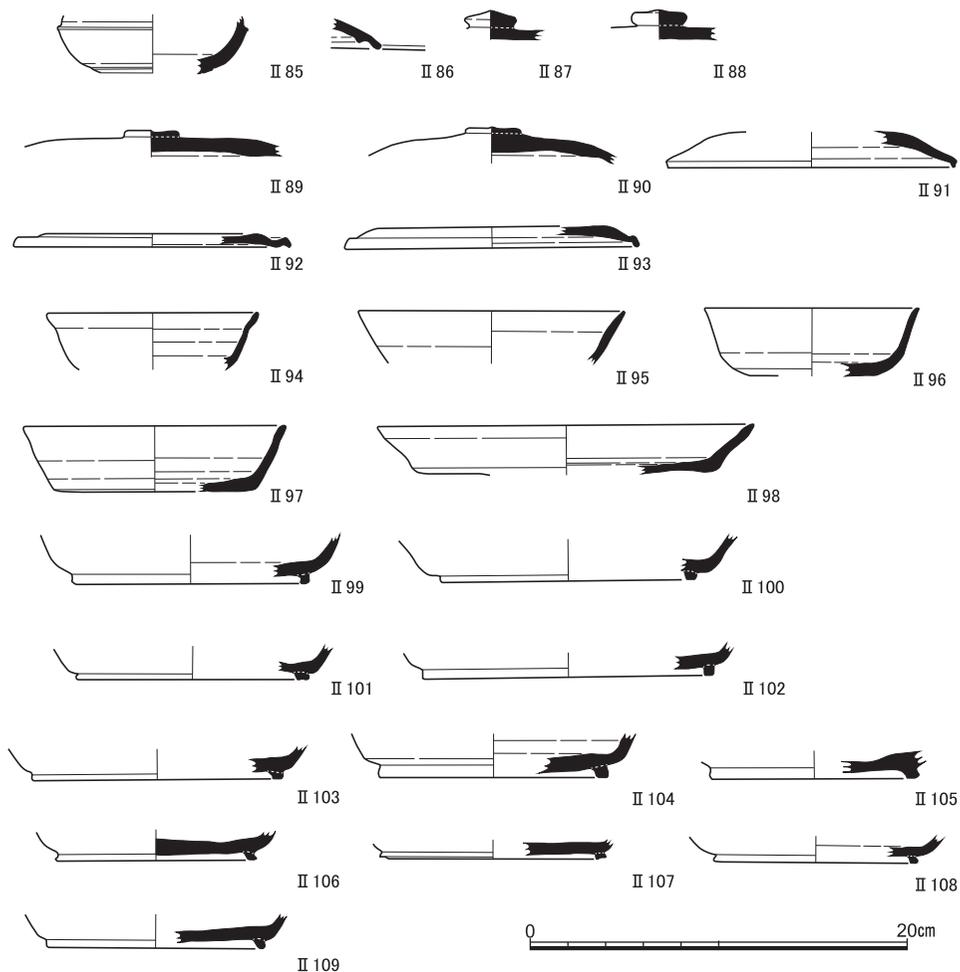


図11 須恵器 (2)

口縁部をもち、屈曲部に2条の沈線がめぐる。内面全面に青海波の当て具痕、外面の上半は丁寧に撫で消されるが、下半には平行叩き痕がのこる。II 71・II 72は強く外反する口縁部片で、外面に櫛描波状文を施す。甕ないし器台だろう。II 73は、鉢などに分類されているコップ形のものの底部で、厚手の底部まわりに粘土を貼付けて鏝状としている。中心部付近には径1mm程度のごく細い焼成後穿孔がされる。II 74は隼の胴部。小ぶりの製品である。以上はおおむね古墳時代後期～終末期の6～7世紀代のものであろう。

II 75・II 76は口縁が短く直線的に立ち上がる壺。II 77は壺Gなどと分類されている小型

壺の口縁で、Ⅱ78は糸切り痕をもつその底部。Ⅱ79も壺の底部で、外側に踏ん張る高台をもつ。Ⅱ80は高杯の脚で、柱状部が遺存する。Ⅱ77・Ⅱ78は平安時代、ほかは奈良時代であろう。

Ⅱ81は厚手の器壁をもつボウル型の鉢。口唇部は平坦な面をもち、底部は低平な高台を貼り付ける。硬質の焼成で灰白色の色調を呈する。東海地方の製品だろうか。Ⅱ82は玉縁状に肥厚する口縁部で、平安期の篠窯産の鉢。

Ⅱ83は小さな断面三角形の高台を、焼成前に斜めに切り落として斜台とした底部。見込み側は平滑になるとともに墨が付着している。硯として当初より製作されたものだろう。薄手で灰色を呈するので、須恵器ではなく灰釉陶器である可能性もある。

Ⅱ84は円面硯で、脚部は逸失しているが、陸の中央が弱く凹む硯面部の1/4程度が遺存する。硯面の外径は約14cm。脚の形状はうかがえないが、遺存している孔の上辺からみて、わずかに丸みを帯びる方形ないし長方形の透かし孔が16箇所めぐっていたものと復元される。京都大学構内での円面硯の出土は初例となる。奈良時代のものであろう。

Ⅱ85～Ⅱ109は各種の杯と蓋類。Ⅱ85はかえりをもつ杯身で、5世紀代の可能性がある。Ⅱ86はかえりをもつ杯蓋で7世紀ごろの製品といえる。Ⅱ94～Ⅱ96のような薄手小型で口唇部を尖らすような形状の杯身が、この蓋に対応する身だろう。ほかはいずれも奈良～平安時代の製品とみられ、蓋には、しっかりとした宝珠つまみをもつⅡ87・Ⅱ88と、つぶれて扁平化したつまみのⅡ89・Ⅱ90がみられる。身には、Ⅱ97・Ⅱ98のような高台をもたない杯Aもあるが少数で、外に踏ん張るようなしっかりとした高台をもつ杯Bが中心となっている。

小 結 以上、本来の遺構を離れた遊離資料ではあるが、抽出できた弥生～古代の出土遺物の主要なものについて報告した。冒頭にも触れたように、通時的な出土をしているが、弥生時代後期～終末期と奈良時代ころについては遺存の良い資料が量的に目立つ。土取りにより破壊された遺構や包含層の遺物とその埋土中に含まれているとして、遺存が良好である遺物は、それほど距離を隔てたり複数の移動を経っていない可能性を示唆すると仮定するならば、医学部構内周辺におけるこれらの時期の遺跡存在に注意を払っておく必要があるだろう。

弥生時代に関しては、今回調査地の北に隣接する64地点における立合調査で、遺存の良い弥生後期後半の土器出土が報告されている〔樋口ほか1980 p.5〕。今回の土器出土とあわせて、一帯にこうした段階の小規模な集落や墓域の単位がひろがっていた蓋然性が高ま

ったと言えるだろう。

また、奈良時代に関しても、調査地の北方200mの74地点で二彩釉陶器の出土が知られるほか〔清水・吉野1981 p.16〕、南方100～200m程度の病院構内の調査において、7～8世紀代の遺構遺物が見出されている〔五十川^{ほか}1989 pp.10-11〕〔浜崎^{ほか}1993 pp.11-12〕。かねてより、吉田南構内から本部構内にかけて奈良時代の遺構が散発的に確認されることは注意されてきたが、今回の成果を考慮すると、それらは西南方の医学部・病院構内へも線的な分布傾向として続いているとも見なせよう。交通路の位置を考える上でも示唆的な状況であり、今後そうした問題意識で周辺一帯の調査を注視していく必要性を指摘しておきたい。

なお本章は、1を笹川、2を千葉、3を伊藤が執筆した。

第3章 京都大学病院構内 AG11区の発掘調査

伊藤淳史 長尾 玲

1 調査の概要

本調査区は、京都大学医学部附属病院西構内の西南部、鴨川の東方約150mに位置し、聖護院川原町遺跡に含まれる(図版1-515, 図12)。今回、この地に京都大学(南部)基幹・環境整備(屋外排水施設)工事にともない、雨水貯留施設の新営が計画されたため、予定地について発掘調査をおこなった。調査期間は2023年11月13日から11月30日。調査面積は195㎡で、出土遺物総量は整理用コンテナ4箱。

一帯は、平安時代後期白河院の御所「白河北殿」の北辺地域に比定されており、構内東南域の19・39・122地点などでは、12世紀後葉以降の濃密な遺構・遺物のひろがりが見られる。しかし、それらは200地点までで、より西方では中世以前の成果は認められず、近世以降の耕地開発にともなう井戸や柵列、水路や路面などが検出される状況にある。調査地東北側の379・398地点の調査においては、江戸時代における聖護院村と吉田村の境界付近をはしる路面や水路が見つかり、17世紀代の構築と幕末期の廃絶が確認された。一方、東側隣接地を広く調査している349地点では、2枚の近世遺物包含層とともに、耕作関連の井戸や野壺、溝や柱穴列などが検出されているが、18世紀前半代までは遺物・



図12 調査地点の位置 縮尺：左1/5万, 右1/5000

遺構とも散漫で、本格的な開発は18世紀後半以降との評価が下されている。すでに近年、419地点の立合調査などで、周辺に近世遺物の包含層が堆積していることは認識されつつあったが、その具体的な開発時期や過程を詳細に把握していくことが、今回の課題となるところであった。

調査の結果、現地地表下80cmに、近世遺物を包含する厚さ30cm程度の黒褐色土、その下部に20～30cm程度の淡褐色土の堆積を全域で認め、基盤となる砂礫層に達した。これらは、周辺調査区と同じ状況であり、西方への近世遺跡のひろがりという点について確実な知見を追加することとなった。同時に、基盤の砂礫層上面では、南北方向で幅がさまざまな溝群が検出された。これらの埋土からも染付磁器が出土し、18世紀後半以降の本格的開発という従来の想定をおおむね裏付ける成果が得られたといえる。

2 層 位

調査区北壁の層位を示す(図13)。基本的な層序は調査区全域で同じだが、北壁側は、調査前に植栽があった影響で、第1層とした大学設置以降の堆積とみられる表土・攪乱層が厚くなっており、調査区周囲の現地表面の標高は46.5m前後である。また、下部の砂礫層に西へ向かって落ち込む堆積が北壁では確認され、これらはa～dとして区別した。

以下、大学設置以前の堆積と見做せる第2層から下部について順に説明する。

第2層黒色砂質土は、調査区の北辺付近のみに薄く認められる堅く締まった堆積。下部の黒褐色土の上部よりやや砂が卓越している。調査区の東辺一帯は、この層も含めて表土除去後の面から下部はいずれも乾燥が早く、すぐに硬化する状況であったため、路面の存在も考慮されたが、舗装や造成をうかがわせる様相は確認できなかった。

第3層黒褐色土は、粗砂質で遺物や炭片などを多く含む堆積で、やや明るい色調の上部の3aと下部の3bに細分される。いずれも近世末～近代初頭ころの堆積で、ひろく病院西構内一帯の既往の調査で表土下に確認される土層である。

第4層灰褐色土は、上部の黒褐色土から下部の淡褐色土へ漸移的に移行する部分といえる。全域に明瞭に確認されるものではなく、土質としては黒褐色土と同様の堆積である。

第5層淡褐色土は、粗砂質で5cm程度大までの礫を少量交える堆積で、やや暗い色調の5aと下部の5bに細分される。5a層は、上部の黒褐色土や灰褐色土から漸移的に色調が移行している部分と考えられ、礫の含有がやや多くなるほかは、土質としては大差ない。遺物はごく微量だが染付磁器などが包含されているので、近世後半期の堆積といえる。

層 位

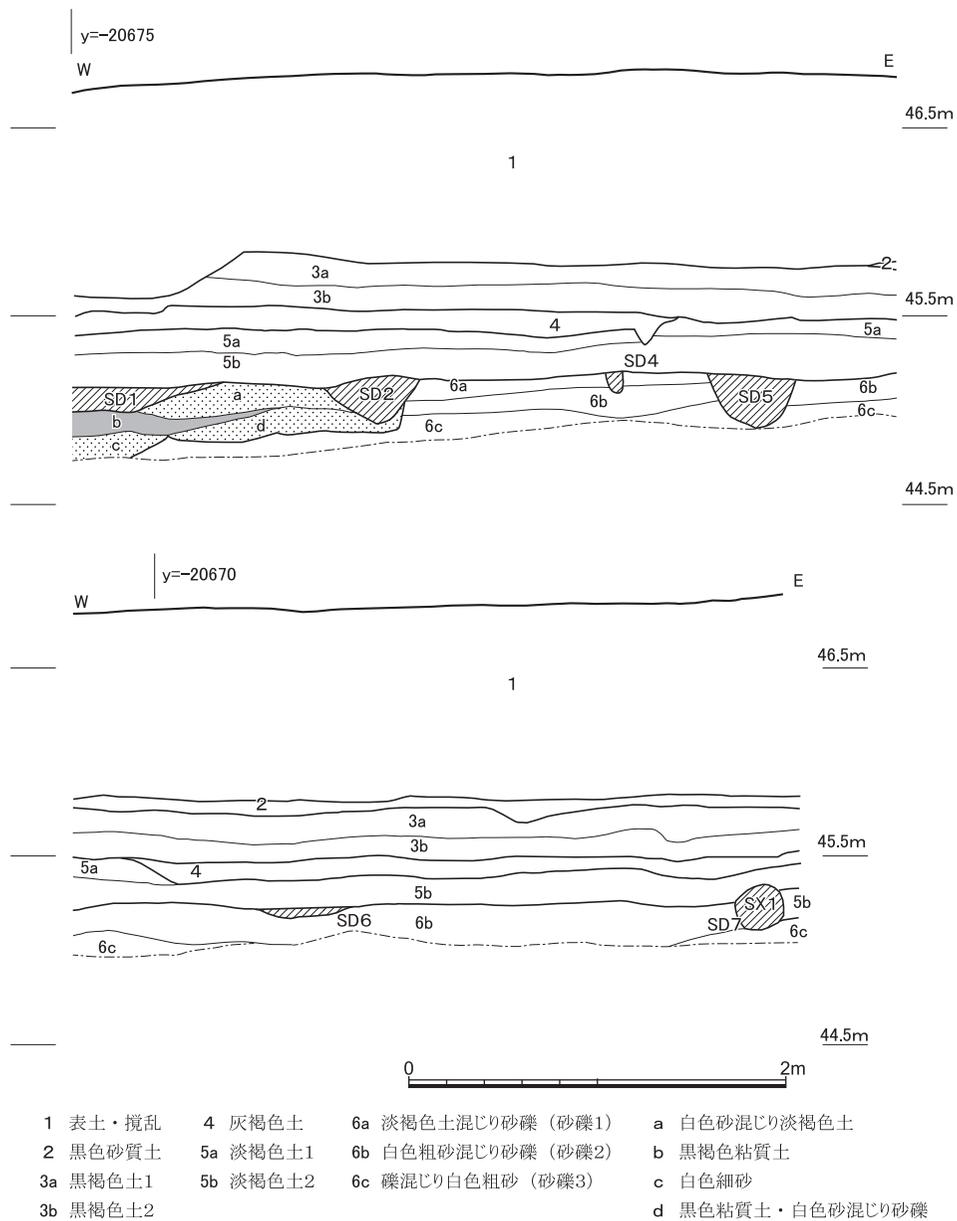


図13 調査区北壁の層位 縮尺1/40

第6層は調査地一帯の基盤となっている砂礫層で、粗砂や土、10cm程度大までの礫のいずれが主体を成すのかの相違で6 a・6 b・6 cに細分しているが、一連のものであろう。磨滅した土師器や陶器類の細片を微量認めることができる。調査地一帯に鴨川の流れが及んでいた中世以前に形成されたものと考えて良いだろう。

以上のほか、今回は西壁際で西へ落ち込む堆積を確認することができ、a～dとした。ここで注目されるのはb黒色粘質土で、上下の粗砂や砂礫層の間に10cm前後の厚さで濃密に堆積する（図版5-3）。基盤の砂礫内でこのような粘質土は、近接する調査地では確認されていない。鴨川の流れからの離水前後に安定化していく過程で、浅い淀みのような湿地帯が形成されていた様相がうかがわれよう。なお、包含遺物は確認されなかった。

3 遺 構

調査では、表土・攪乱除去後の黒褐色土上面、黒褐色土除去後の淡褐色土上面、淡褐色土除去後の砂礫上面の3面で遺構検出をおこなった（図版4・5）。ここでは、大学敷地となる以前の遺構と判断される淡褐色土上面と砂礫上面の2面で検出された遺構についてそれぞれ図示し、説明する（図14）。なお、調査区東北角付近は、銀杏巨木の根株が基盤の砂礫層より深くまで及んでいたため、除去できずに調査を断念している。このため東北角のみ調査範囲が不整形に狭まっている。

淡褐色土上面では、遺構は希薄であり、野壺SE1のほかは、一辺が10～15cm程度の方形の小ピットと、それよりやや大きめの方角や円形のピット若干が検出されたにとどまる。SE1は、径1.5m程度の漆喰製井筒で、深さは淡褐色土上面からは60cm前後をはかる。ただし、表土除去後の黒褐色土中からすでに輪郭があらわれており、本来はより深さのあるもので、時期も新しいものであったと判断してよい。黄色の粘土と漆喰の残骸で埋没しており、陶器の土瓶（Ⅲ45）ほぼ1個体分が出土している。大学設置以降の遺物は含まれていないので、その段階では廃絶していたのだろう。

方形の小ピットは、農耕関連の柵列などの痕跡かとみられるもので、これまで周辺の調査では、深さもあり並びが確認ができるようなものが多数確認されてきていたが、今回は浅いものがほとんどで、並びは確認出来なかった。それ以外の方角や円形のピットでは、調査区の南壁際で、径30cm程度の円形で深い掘り込みをもち、内部に円礫を充填するようなピットが3基検出され、攪乱で1基滅失していると想定すると1.8m間隔で東西の並びを想定できることから、SA1とした。建物か柵列かは不明である。また、方形で一辺が

遺 構

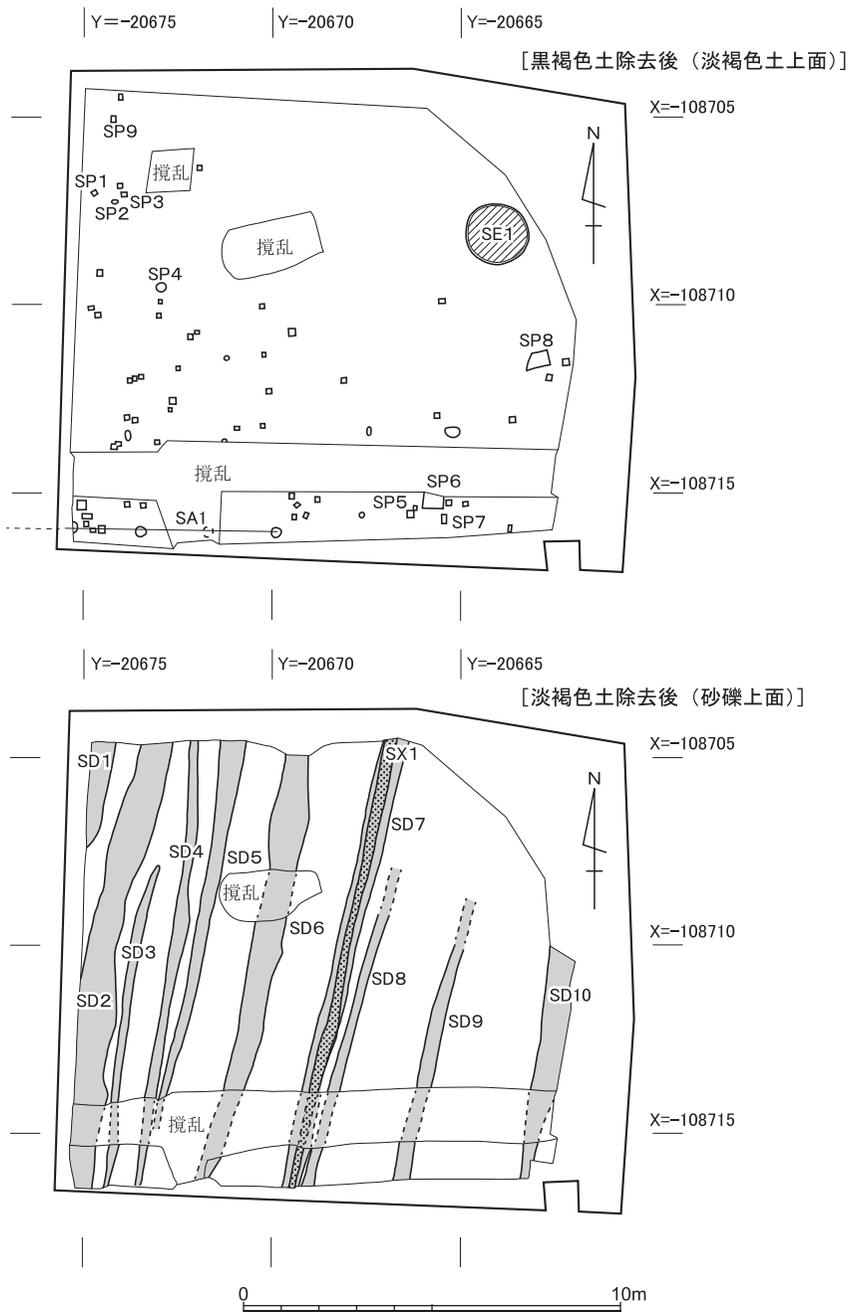


図14 調査区検出の遺構 縮尺1/200

60cm程度をはかり、内部に礫が詰まっている遺構SP6やSP8については、既往の調査でラチス状遺構と称されて列を成して検出されるような遺構に類するものと思われるが、今回はこのようにまばらに把握されるにとどまっている。

砂礫上面では、方位を真北から東に振る南北溝SD1～SD10が検出されたほか、小礫による畝状の高まりSX1が、溝と同方向に淡褐色土中で確認された。

南北溝は、幅・深さとも10cm程度の浅く不鮮明なものから、幅は最大で1m近くになるSD2やSD6など、規模がさまざまである。調査区西辺をはしるSD1やSD2は、下部に見出されている砂礫の落ち込みの埋積過程で生じたものともみることができ、粗砂混じりの淡褐色土を埋土として30cmあまりの深さがある。一方、SD6は、幅は広いが礫混じりの淡褐色土を埋土とした10cm程度の浅いものである。SD10は、調査区東壁際に検出されたため、全容を明らかにし得なかったが、淡褐色土を埋土として明瞭な輪郭と掘り込みをもつものであった。

小礫による畝状の高まりSX1は、最大で幅・高さ30cm程度の規模になるように、5cm程度大の小礫を密にまとめた列状の集石で、淡褐色土中において、南北溝群と同様な東に振る方位で南北にはしるように検出された(図版5-2)。断面での所見も加味すると、砂礫上面に積み上げて構築されているのではなく、淡褐色土中で溝を掘り込むようにしてその内部に小礫を充填したものであると判断される。集石の下部より同一方向にはしるSD7が検出されており、一連の遺構であった可能性が高い。集石中には近世の陶器片や瓦が一部に混じっていた。耕作にかかわる湿気抜きや排水を意図したものであろうか。

以上の溝群や集石からは、少量ではあるが染付磁器を含む遺物が出土しており、近世以降に形成された遺構群であったとみてよかろう。これは、隣接する既往の調査地で検出された類似遺構に関わる所見とも一致する。明確な根拠を得てはいないが、耕作にともなう鋤溝というよりは、一帯が耕地として開拓される過程における耕起や地盤改良にともなう痕跡ではないかと想定している。また、方位がいずれも東に振っていることは、鴨川から離水して時間を経っていない段階において、北東-南西へ流下する流れが前段階で卓越していたのであろう一帯の地勢を反映しているのではないかと推察しておきたい。

4 遺物

基盤の砂礫層から出土する磨滅した遺物には、図化に耐えるものがない。多くが土師器片で、中世以前のもののみられ、染付磁器など明らかに近世とみるものは含まれない。こ

ここでは、それより上部の遺物包含層である淡褐色土と黒褐色土、およびそれらを埋土とする遺構出土遺物を抽出して呈示する（図15・16）。

淡褐色土出土遺物（Ⅲ1～Ⅲ4・Ⅲ17～Ⅲ22） 包含される遺物は少なく、また残存率も悪いものが多い。Ⅲ1～Ⅲ3は土師器皿。いずれもかろうじて1/12程度残存するもの。Ⅲ1とⅢ2は見込みに圏線をもつもので、口径10cm内外。Ⅲ3はそれらより小ぶりで偏平な皿。Ⅲ4は陶器の灯明皿。内面に透明釉がかかり、平行な細線が施される。Ⅲ17～Ⅲ19は陶器で、それぞれ、甕口縁、土瓶の肩部、茶入れなどの下半部か。Ⅲ19は回転糸切底に「仁清」の刻印がある。

黒褐色土出土遺物（Ⅲ5～Ⅲ16, Ⅲ23～Ⅲ35） Ⅲ5～Ⅲ8は土師器皿。Ⅲ5は直線的な器形で口径14cmをはかり、見込みの圏線がわずかに残存している。Ⅲ6・Ⅲ7は口径10cm足らずで、やはり見込みに圏線をもつが、Ⅲ7は著しく扁平な器形となる。Ⅲ8は口径5cm強の小皿。Ⅲ9は「つぼつぼ」と呼ばれる小型品で、口径3cm足らず。口唇部は狭いが面をもっている。白色を呈するが、胎土は精良さをやや欠いて、仕上げも粗雑な雰囲気がうかがわれる。

Ⅲ10～Ⅲ16は陶器の灯明受皿や灯明皿。いずれも口縁部から内面側に透明釉がかかる。法量では、灯明受皿は口径7～8cmのものと11cmの2つに分かれるが、灯明皿は12cm前後のみが認められる。

Ⅲ23～Ⅲ28は陶器。このうちⅢ23・Ⅲ24は軟質施釉陶器で、径3cm前後の極小で外面のみ施釉の蓋。Ⅲ25～Ⅲ28は明らかに蓋形のもの（Ⅲ25・Ⅲ27・Ⅲ28）とともに、大きめの

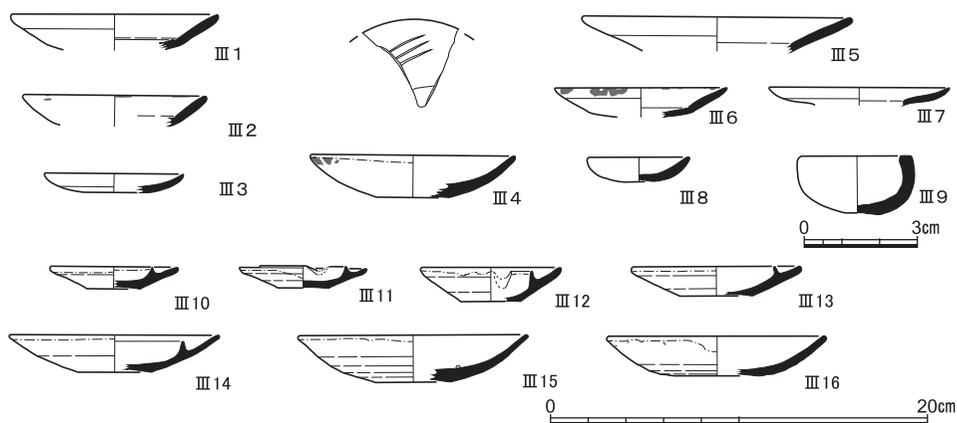


図15 淡褐色土出土遺物(1) (Ⅲ1～3土師器, Ⅲ4陶器), 黒褐色土出土遺物(1) (Ⅲ5～Ⅲ9土師器, Ⅲ10～Ⅲ16陶器), Ⅲ9のみ縮尺1/2

鉢や皿の底部かとみられるⅢ26もある。Ⅲ29～Ⅲ35は磁器。Ⅲ29は内外とも厚く施釉され貫入も著しい小椀。Ⅲ30やⅢ33は薄手で口縁部が大きく外反する。Ⅲ33には金継ぎが認められる。Ⅲ31は外青磁の筒形椀。Ⅲ32は色絵である。Ⅲ34・Ⅲ35は白磁の紅皿と称される製品で、Ⅲ34は口径4.6cmで皿形、Ⅲ35は口径2cmの椀形。

S X 1 出土遺物 (Ⅲ36～Ⅲ39) Ⅲ36は土師器皿。見込みの圏線は残りが悪く判然としない。Ⅲ37は陶器の椀。高台の内側も含めて前面に淡黄色の釉がかけられている。Ⅲ38は陶器すり鉢の口縁部。暗赤褐色を呈し、端部は縁帯状に肥厚する。Ⅲ39は磁器で小さく突出気味の底部。底面と見込みは露胎。

S D 2・S D 3・S D 10 出土遺物 (Ⅲ40～Ⅲ43) 砂礫上面で検出された溝群の埋土中からの出土遺物である。Ⅲ40は京・信楽焼系の陶器椀の底部かとみられる。Ⅲ41は磁器染付の皿。Ⅲ42・Ⅲ43は土師器で、Ⅲ42は皿。Ⅲ43口縁が鏝状に外反する鉢。

S P 6 出土遺物 (Ⅲ44) 淡褐色土上面で検出されたピット内からの出土遺物。陶器の底部。徳利の下半部であろうか。内面にはミズビキ痕が顕著で、内外両面とも全面に鉄釉がかかる。

S E 1 出土遺物 (Ⅲ45・Ⅲ46) 黒褐色土中で確認された漆喰製野壺の埋土からの出土遺物。Ⅲ45は陶器土瓶で、ほぼ完形に復元できるように破片が一括出土した。器壁は極めて薄い。「萬屋横丁」かと読めるような文字が釉描されている。Ⅲ46は泥めんこ。

5 小 結

以上に報告したように、今回の調査区においては、おおむね18世紀代以降の遺構・遺物とともに、安定した遺物包含層の堆積が確認された。その頃より土地条件の安定化にともなう開発が本格化していったことがうかがわれる。こうした状況は、東～北側隣接地一帯での既調査地点における所見と、時期的な細部についての異同は検証を重ねる必要があるものの、齟齬のない成果である。より鴨川に近い西側一帯にも同様な状態がひろがっていることが明瞭になったといえよう。立合調査ではあるが、今回よりも西に位置する419地点においても、近世遺物包含層の確認が報告されているので、同時期の遺跡のひろがり、さらに西方へと及んでいる可能性も高いとみるべきだろう。

ただし、今回の出土遺物は整理箱4箱にとどまっており、調査面積の狭小さを考慮しても、減少傾向がうかがえる（東接する349地点では2164㎡で123箱）。そして、淡褐色土上面で検出される遺構もまばらであった。周辺部的な様相が顕在化している、と評価する

小 結

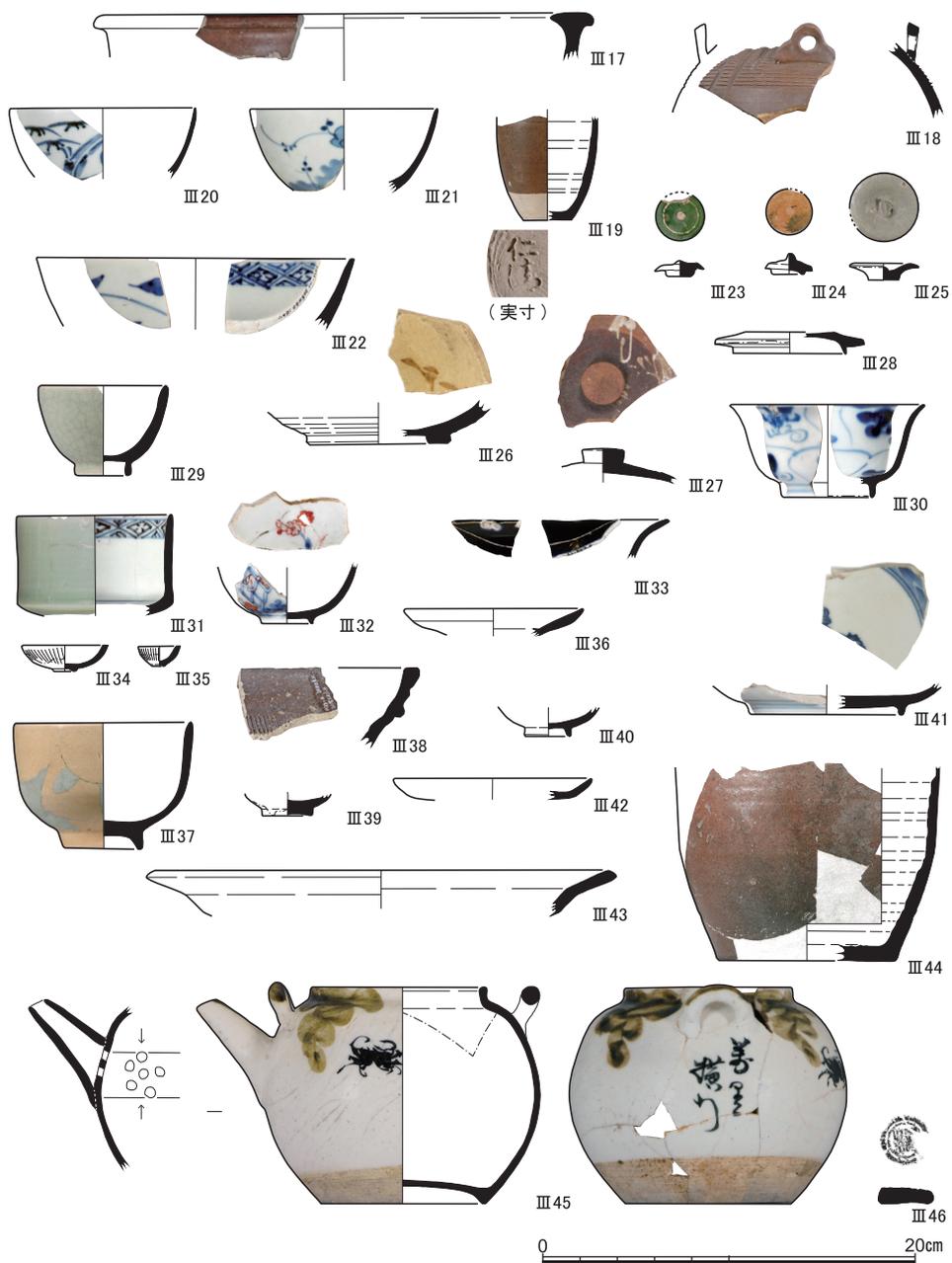


図16 淡褐色土出土遺物(2) (Ⅲ17～Ⅲ19陶器, Ⅲ20～Ⅲ22磁器), 黒褐色土出土遺物(2) (Ⅲ23～Ⅲ28陶器, Ⅲ29～Ⅲ35磁器), S X 1 出土遺物 (Ⅲ36土師器, Ⅲ37・Ⅲ38陶器, Ⅲ39磁器), S D 2 出土遺物 (Ⅲ40陶器, Ⅲ41磁器), S D 3 出土遺物 (Ⅲ42土師器), S D 10出土遺物 (Ⅲ43土師器), S P 6 出土遺物 (Ⅲ44陶器), S E 1 出土遺物 (Ⅲ45陶器, Ⅲ46土製品)

こともできよう。なお、今回調査地の北西120m程度に位置する稲森財団記念館建設時の立合調査所見で、安定した耕作土層ではなく水成堆積層の確認にとどまったことから、鴨川に築堤がなされない「遊水池」的な空間に相当した可能性が指摘されている〔千葉2022 p.57〕。今回、調査区西辺で、下部の砂礫層内に黒色粘土層や砂層を介在させる落ち込みが確認され、浅い淀みのような環境が一带の離水過程で生じていた可能性に言及したが、このような遊水地の一端が、ある段階には及んでいたものかもしれない。いずれにせよ、こうした課題は、さらに西方での調査所見を蓄積することで、解決に向かうことになる。

その後の調査地一帯は、幕末期の文久4年（1864）における会津藩副邸地の設定と洋式練兵場としての利用、維新後の牧畜場への移行を経て、明治45年（1912）年に附属病院敷地となる履歴が知られている。現状では、これらとしての利用痕跡を遺構で認識できていないが、周辺で広域に検出できる厚い黒色系の近世遺物包含層の生成要因とともに、今後多面的な検証を行っていくことも課題となろう。

今回の調査と本章の作成は、伊藤淳史が担当し、長尾玲・磯谷敦子・河野葵が補助した。

執筆は、長尾との協議を経て伊藤がまとめた。調査中、堆積層の理解については辻康男氏（株）パレオ・ラボ）に種々ご助言いただいた。末尾ながら御礼申し上げる。

参考文献

- 石田志朗・中村徹也・中村友博 1972年 『京都大学理学部構内遺跡発掘調査の概要』
- 泉 拓良 1977年 「京都大学植物園内遺跡」『仏教芸術』115号
- 五十川伸矢 1986年 「京都大学医学部構内A N20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度』
- 五十川伸矢・浜崎一志・伊東隆夫 1989年 「京都大学病院構内A J 18・A J 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』
- 伊藤淳史 1999年 「北白川追分町弥生時代遺跡の展開—京都大学北部構内B A30区（追分地蔵地点）の出土資料—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1995年度』
- 2003年 a 「京都大学医学部構内A O17区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1999年度』
- 2003年 b 「比叡山西南麓における縄文から弥生—京都大学構内遺跡出土資料の紹介と検討を通じて—」『立命館大学考古学論集』Ⅲ
- 2010年 「鴨東の古代—古墳～奈良時代の遺跡調査成果からみた集団動態—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2007年度』
- 2018年 「京都大学構内遺跡出土の平安時代土馬—吉田南構内A O22区出土資料の紹介—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2016年度』
- 伊藤淳史・富井眞 2018年 「京都大学北部構内B C30区ほかの立合調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2016年度』
- 上田正昭・川上貢・濱崎一志 1986年 「昭和58年度京都大学構内遺跡調査の概要」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度』
- 梅原末治 1923年 「京都帝国大学農学部敷地ノ石器時代遺跡」『京都府史蹟勝地調査會報告 第5冊』
- 1935年 「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告 第16冊』
- 1936年 「摂津阿武山古墓調査報告」『大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告 第7輯』
- 小野山節・都出比呂志 1973年 『高槻市安満遺跡の条里遺構』
- 小野山節・中村徹也 1976年 『京都大学教養部A号館増築予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要』
- 梶原義実 2003年 「13世紀における「中央官衙系」瓦工の編成と展開—京都大学医学部構内A O18区の資料から—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1999年度』
- 京大調査会（京都大学農学部構内遺跡調査会・京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会）
1977年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』
- 京大埋文研（京都大学埋蔵文化財研究センター）
1978年 a 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』
1978年 b 『京都大学埋蔵文化財調査報告第1冊—京大農学部遺跡B G36区—』
1979年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』
1980年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』
1981年 a 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ—白河北殿北辺の調査—』

参 考 文 献

- 1981年 b 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』
1983年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』
1984年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』
1985年 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ—北白川追分町縄文遺跡の調査—』
1986年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度』
1987年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度』
1988年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和60年度』
1989年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』
1990年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度』
1991年 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ—京都大学病院構内遺跡の調査—』
1992年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1988年度』
1993年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1989～1991年度』
1995年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1992年度』
1997年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1993年度』
1998年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1994年度』
1999年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1995年度』
2000年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1996年度』
2002年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1997・1998年度』
2003年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1999年度』
2005年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2000年度』
2006年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2001年度』
2007年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2002年度』
2008年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2003年度』
- 京大文総研 (京都大学文化財総合研究センター)
- 2009年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2004～2006年度』
2010年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2007年度』
2011年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2008年度』
2012年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2009年度』
2013年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2010年度』
2014年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2011～2012年度』
2015年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2013年度』
2016年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2014年度』
2017年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2015年度』
2018年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2016年度』
2019年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2017年度』
- 京大文遺活 (京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター京大文化遺産調査活用部門)
- 2020年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2018年度』
2021年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2019年度』
2022年 a 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2020年度』
2022年 b 『都市近郊地域歴史像の再構築—京都・白川道の研究を基盤として—』平成31年～令和3年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書

参 考 文 献

- 2023年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 2021・2022年度』
- 笹川尚紀・金光桂子・千葉豊 2021年 「京都大学構内遺跡出土の和歌墨書土器」『史林』第104巻第4号
- 島田貞彦 1924年 「京都市北白川追分町発見の石器時代遺跡」『考古学雑誌』第14巻第5号
- 島田貞彦・水野清一・小川五郎・三宅宗悦 1929年 「摂津国高槻「摂津農場」石器時代遺跡調査報告」『人類学雑誌』第44巻第7号
- 清水芳裕 1991年 「遺跡の形成と地形の変化」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ』
- 清水芳裕・吉野治雄 1981年 「京都大学医学部構内A P 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』
- 千葉 豊 1991年 「病院構内の先史時代遺跡」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ』
- 2013年 「京都大学北部構内採集の石棒」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2010年度』
- 2018年 「蓮月焼を模倣した陶器について—京都大学病院構内A E 19区S K 15出土資料—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2016年度』
- 2022年 「砂川と弥勒川」『都市近郊地域歴史像の再構築—京都・白川道の研究を基盤として—』
- 千葉豊・富井眞・井上智弘 2007年 「京都大学病院構内A E 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2002年度』
- 富井 眞 1998年 「北白川追分町遺跡出土の縄文土器—北白川C式の成立を考える—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1994年度』
- 内記 理 2022年 「2020年度・2021年度京都大学本部構内の発掘調査」『都市近郊地域歴史像の再構築—京都・白川道の研究を基盤として—』平成31年～令和3年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書
- 中村徹也 1973年 『京都大学農学部総合館周辺埋蔵文化財発掘調査の概要』
- 1974年 a 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅰ』
- 1974年 b 『京都大学理学部ノートパイオロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』
- 1975年 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅱ』
- 浜崎一志・千葉豊・森下章司 1993年 「京都大学病院構内A H 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1989～1991年度』
- 樋口隆康・亀井節夫・泉拓良・岡田保良 1980年 「昭和54年度京都大学構内遺跡調査の概要と成果」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』
- 藤岡謙二郎 1973年 「北白川扇状地と教養部構内発見の遺物包含層並びにその先史地理的意義」『人文』第19集（京都大学教養部）
- 横山浩一・佐原眞 1960年 『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第1部日本先史時代

表1 京都大学構内遺跡のおもな調査

(地点は図版1を参照, 文献中「埋」は京大埋文研, 「調」は京大調査会, 「文」は京大文総研, 「遺」は京大文遺活をさす。)

年度	遺跡名	調査地点	担当者	調査の種類	面積 (㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1923	農学部	1・2	濱田耕作	表探・掘試			縄文土器, 石器	梅原23, 島田24	
1924	農学部	不明	藤本理三郎				石棒	横山・佐原60	
1929	大阪府満		島田貞彦 水野清一 ほか	発掘			弥生土器	島田・水野ほか29	
1934	大阪府阿武山古墳		梅原末治	発掘			乾漆棺, 玉飾枕	梅原36	
1935	北白川小倉町		梅原末治				縄文土器, 石器	梅原35	
1956	農学部	3	羽館易	採集			縄文土器		
1971	農学部	4	石田志朗	採集			弥生土器	埋79	
1972	農学部	5		採集			石棒	千葉13	
1972	大阪府満		小野山節都 出比呂志	事前発掘	1500	条里の溝	弥生土器	小野山・都出73	建物をずらし条里の溝を保存
1972	追分地蔵	6	石田志朗 中村徹也	事前発掘	600		弥生土器	石田ほか72, 伊藤99	
1972	教養部	7	藤岡謙二郎	工事中採集・実測			縄文土器	藤岡73	
1973	農学部	8	中村徹也	事前発掘	13	瓦溜	縄文土器, 瓦(平安)	埋78b	瓦溜埋戻し
1973	農学部	9	中村徹也	事前発掘	600		縄文土器, 土師器	中村73, 伊藤・富井18	
1973	植物園	11	中村徹也	事前発掘	400	縄文後期甕棺・配石遺構	縄文土器	中村74b, 泉77	甕棺・配石遺構の移築を決定
1974	農学部	12	中村徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村74a	
1974	農学部	13	中村徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村75	
1975	教養部	14	小野山節 中村徹也	事前発掘	750		土師器, 瓦, 陶磁器	小野山・中村76	
1976	農学部 BE33区	16	泉拓良	事前発掘	900	縄文晩期土壇墓	縄文土器, 土師器, 瓦	調77	
1976	病院 AE15区	19	岡田保良	事前発掘	2200	古代・中世溝, 池, 土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器	調77, 埋81a	
1976	植物園 BD35区	29	吉野治雄	保存				調77	甕棺・配石の移築復元
1976	病院 AH17区	34	泉拓良	事前発掘	200	近世溝, 井戸, 集石	土師器, 瓦	埋78a	
1976	教養部 AS23区	35	吉野治雄	試掘	10	溝	縄文土器, 須恵器	調77	
1976	北部 BJ33区	36	宇野隆夫	試掘	10		縄文土器	調77	
1976	和歌山県瀬戸		丹羽佑一	事前発掘	300	縄文時代土壇墓	縄文土器, 人骨	埋78a	
1977	病院 AF14区	39	岡田保良 宇野隆夫	事前発掘	800	古代護岸, 溝, 井戸	土師器, 瓦, 陶磁器	埋78a, 埋81a	
1977	医学部 AO18区	41	泉拓良 吉野治雄	事前発掘	1200	中世溝, 土器溜, 井戸	土師器, 瓦, 陶磁器	埋79, 梶原03	
1977	北部 電気管	43	吉野治雄 宇野隆夫	立合		溝, 土坑	須恵器, 土師器	埋78a	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1977	教養部 AQ23区 AN23区	48	宇野 隆夫	試掘	80	溝	弥生土器, 土師器, 瓦	埋79	
1977	白河北殿 比定地 AA18区	49	岡田 保良	試掘	40	溝	土師器, 瓦, 陶磁器	埋79	
1978	理学部 BE29区	54	岡田 保良 宇野 隆夫 吉野 治雄	事前発掘	500	弥生中期方形周溝墓, 中世火葬塚	弥生土器, 土師器, 瓦	埋79	火葬塚と方形周溝墓を現地保存
1978	農学部 BG32区	55	泉 拓良 宇野 隆夫	事前発掘	100	縄文土坑, 古代溝, 土坑	縄文土器, 土師器	埋79	
1978	北 部 BG31区	56	泉 拓良 宇野 隆夫	事前発掘	650	縄文晩期埋没林	縄文土器	埋80, 埋85	
1978	本 部 AW28区	57	岡田 保良 吉野 治雄	事前発掘	500	近世白川道	陶磁器, 土師器, 銭貨	埋80	
1978	本 部 AY22区	60	泉 拓良	立 合		高野川旧河道		埋79	
1978	医学部 AN19区	64	吉野 治雄	立 合		井戸, 溝	弥生土器	埋79, 埋80	
1979	北 部 BH37区	66	吉野 治雄	試掘	46	土坑	土師器, 須恵器	埋80	
1979	教養部 AM24区	69	岡田 保良 清水 芳裕	試掘	8		弥生土器, 土師器	埋80	
1979	本 部 AZ30区	71	清水 幸治 浜崎 一志	試掘	30	中世溝	土師器, 瓦, 瓦器	埋80	
1979	医学部 AP19区	74	清水 芳裕 五十川 伸矢 吉野 治雄	事前発掘	2776	中世溝, 井戸, 土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器, 旧石器	埋81 b	
1979	本 部 AT27区	75	五十川 伸矢	事前発掘	400	奈良後期竪穴住居, 中世土壇墓, 近世道路	土師器, 須恵器, 白磁	埋81 b	竪穴住居跡を現地保存
1979	北 部 BD32区	79	泉 拓良	立 合			瓦(平安)	埋80	
1980	本 部 AT27区	89	泉 拓良	事前発掘	115	近世道路, 堀	土師器, 近世陶磁器	埋81 b	
1980	本 部 AX28区	90	泉 拓良 五十川 伸矢 浜崎 一志	事前発掘	1120	近世白川道, 中世土器溜, 井戸, 建物	土師器, 瓦, 陶磁器, 銅鏃(弥生), 磨製石鏃	埋83	
1980	京 都 府 美 月		泉 拓良 清水 芳裕 五十川 伸矢 浜崎 一志 吉野 治雄	事前発掘	1468	弥生中期・後期水路, 土坑, 中世土器溜	弥生土器, 打製石斧, 瓦器, 陶磁器	埋83	立合調査中に遺跡を発見, 工事を中断し発掘調査
1980	教養部 AO21区	91	吉野 治雄	事前発掘	112	中世井戸, 土壇墓	土師器, 瓦器, 陶磁器	埋83	
1980	教養部 AM22区	93	吉野 治雄	立 合		火葬墓, 石列	瓦器, 陶器	埋81 b	
1980	本 部 実験排水	98	清水 芳裕	立 合		流路, 中世土器溜	土師器, 丸瓦	埋83	遺構実測
1981	理学部 BD30区	109	泉 拓良 浜崎 一志	事前発掘	272	古代建物, 近世瓦溜	土師器, 瓦, 陶磁器	埋83	
1981	和歌山県 瀬 戸		泉 拓良 清水 芳裕 五十川 伸矢 浜崎 一志	事前発掘	1500	弥生土坑, 弥生配石, 古墳時代土坑	縄文土器, 硬玉管玉, 弥生土器, 製塩土器	埋84	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名	調査地名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1981	本学部	A X28区	110	浜崎 一志	事前発掘	34	中世土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器, 硯	埋83	
1981	教養部	A P22区	111	五十川伸矢 飛野 博文	事前発掘	1716	古墳, 古代梵鐘鑄造遺構, 中世門溝, 墓	縄文土器, 弥生土器, 須恵器, 土師器, 鋳型, 溶解炉	埋84	梵鐘鑄造遺構を現地保存
1981	京都市本	山			分布調査			縄文土器, 緑釉陶器, 灰釉陶器	埋83	
1982	京都府	道		泉 拓良	試掘	20	中世土器溜	縄文土器, 土師器	埋84	
1982	病院	A F15区	122	清水 芳裕 浜崎 一志	事前発掘	1028	中世井戸, 溝	白磁	埋84	
1982	農学部	B F33区	123	清水 芳裕 浜崎 一志	事前発掘	787	縄文住居跡, 中世土坑	縄文土器, 土師器	埋84	堅穴現地保存
1982	和歌山県	瀬戸		泉 拓良	事前発掘	297	古代製塩炉	縄文土器, 弥生土器, 製塩土器	埋84	古代製塩炉を移築保存
1982	本学部	A T29区	124	泉 拓良 飛野 博文	事前発掘	890	中世濠, 建物	土師器, 瓦器, 陶磁器	埋86	
1982	農学部	B E33区	125	泉 拓良 飛野 博文	事前発掘	803	中世・近世水田, 溝	土師器, 瓦器, 陶磁器	埋86	
1983	医学部	A N20区	134	泉 拓良 五十川伸矢	事前発掘	863	中世井戸, 土取り穴	須恵器, 瓦器, 土師器	埋86	
1983	北学部	B F31区	135	清水 芳裕 五十川伸矢	事前発掘	737	縄文埋没林, 古代・中世溝	縄文土器, 土師器, 緑釉陶器	埋87, 富井98	
1983	医学部	A M19区	139	泉 拓良 浜崎 一志	立合		中世土取り穴	土師器, 瓦器, 石鍋	埋86	
1984	病院	A F19区	141	浜崎 一志 宮本 一夫	事前発掘	863	近世池, 井戸, 野壺	縄文土器, 蓮月焼	埋87	
1984	病院	A J19区	142	清水 芳裕 浜崎 一志	事前発掘	260	中世土坑, 近世土取り穴	土師器, 近世陶磁器	埋87	
1984	医学部	A N18区	143	五十川伸矢 宮本 一夫	事前発掘	1920	中世井戸, 土取り穴, 中世梵鐘鑄造遺構	土師器, 瓦器, 鋳型	埋88	
1985	北学部	B J31区	153	清水 芳裕 宮本 一夫	事前発掘	624	古代溝, 建物跡, 土坑, 近世溝	弥生土器, 土師器, 須恵器	埋88	
1985	病院	A J18区	154	清水 芳裕 浜崎 一志 菱田 哲郎	事前発掘	4295	中世井戸, 近世土取り穴	土師器, 近世陶磁器	埋89	
1985	病院	A J19区	155	五十川伸矢 宮本 一夫	事前発掘	3000	中世井戸, 近世土取り穴	土師器, 近世陶磁器, 鋳型	埋89	
1986	教養部	A P25区	167	清水 芳裕 宮本 一夫 難波 洋三	事前発掘	599	中世・近世溝	土師器, 近世陶磁器	埋89	
1986	本学部	A X30区	168	清水 芳裕 難波 洋三	事前発掘	330	古代土坑, 中世道	土師器, 陶磁器	埋89	
1986	医学部	A L20区	169	浜崎 難波 一志 洋三	事前発掘	331	近世土取り穴	土師器, 陶磁器	埋90	
1986	教養部	A L23区	170	清水 芳裕 五十川伸矢 浜崎 一志	試掘	24	中世溝	土師器, 瓦器, 陶器	埋89	
1987	北学部	B D33区	180	浜崎 一志 千葉 豊	事前発掘	618	土坑, 河川	縄文土器, 土師器, 須恵器	埋90	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1987	本 部 A W27区	181	五十川伸矢 千葉 豊	事前発掘	1604	中世土坑, 近世道路	縄文土器, 土 師器, 陶磁器	埋92	
1987	北 部 B H35区	182	清水 芳裕	試 掘	16	包含層	土師器, 須恵 器	埋90	
1987	北 部 B D28区	183	清水 芳裕	試 掘	12	包含層	土師器, 須恵 器	埋92	
1987	本 部 A T25区	188	清水 芳裕	立 合		近世尾張藩 邸堀		埋90	
1988	牛ノ宮町 A R19区	190	清水 芳裕 森下 章司	事前発掘	216	中世土坑, 近世道路	土師器, 瓦, 陶磁器	埋92	
1988	病 院 A H19区	191	浜崎 一志 千葉 豊 森下 章司	事前発掘	2495	中世土坑, 溝	土師器, 瓦, 陶磁器	埋93	
1988	病 院 A E12区	192	千葉 豊 森下 章司 宮原恵美子	事前発掘	598.5	近世道路, 溝, 野壺, 井戸	土師器, 瓦, 陶磁器	埋93	
1989	病 院 A E13区	198	千葉 豊 森下 章司 宮原恵美子	事前発掘	805	近世井戸, 野壺, 柵列	土師器, 陶磁 器, 瓦	埋93	
1991	病 院 A G14区	200	千葉 豊 森下 章司	事前発掘	393.5	近世井戸, 道路	土師器, 陶磁 器	埋95	
1991	教 養 部 A R21区	202	五十川伸矢 浜崎 一志 森下 章司	立 合		中世土坑	土師器	埋93	
1992	医 学 部 A M17区	207	五十川伸矢 森下 章司	事前発掘	1950	中世井戸, 土器溜	土師器, 陶磁 器	埋95	
1992	北 部 B A28区	208	浜崎 一志 千葉 豊	事前発掘	1242	噴砂, 古代 埋納遺構, 近世堀	縄文土器, 土 師器, 陶磁器, 棧瓦	埋95	
1992	和歌山県 瀬 戸 本 A V30区	213	浜崎 一志 伊藤 淳史	立 合		縄文包含層	縄文土器, 石 器	埋95	
1992	瀬 戸 本 A V30区	214	千葉 豊 伊藤 淳史	事前発掘	1480	中世砂取り 穴, 近世野 壺	土師器, 陶磁 器	埋97	
1993	北 部 B B28区	217	清水 芳裕 古賀 秀策	事前発掘	1323	古代溝, 中 世土坑	土師器, 陶磁 器	埋97	
1993	本 部 A W25区	218	千葉 豊 吉井 秀夫	事前発掘	929	中世井戸, 濠, 溝, 土 坑	縄文土器, 石 器, 土師器, 陶磁器	埋97	
1993	本 部 A U30区	219	伊藤 淳史 古賀 秀策	事前発掘	1074	弥生流路, 古代溝, 中 世土器溜	弥生土器, 土 師器, 陶磁器	埋97	
1993	総合人間 学 部 A O22区	220	五十川伸矢 伊藤 淳史	事前発掘	4080	弥生水田, 古代梵鐘鑄 造遺構, 中 世井戸, 溝	縄文土器, 弥 生土器, 土師 器, 陶磁器	埋99, 伊藤 03・10・18	梵鐘鑄造遺 構を現地保 存
1993	北 部 B F34区	221	千葉 豊 吉田 広	事前発掘	1228	古代土器溜, 土坑, 中世・ 近世道路	土師器, 陶磁 器	埋98	
1993	病 院 A F12区	222	伊藤 淳史	試 掘	112.5	近世道路	土師器, 陶磁 器	埋97	
1994	北 部 B F30区	229	千葉 豊 古賀 秀策 吉田 広	事前発掘	530	縄文貯蔵穴, 弥生方形周 溝墓, 平安 土城墓	縄文土器, 弥 生土器, 土師 器	埋98	
1994	本 部 A X25区	230	古賀 秀策 吉田 広	事前発掘	1314	古代溝, 土 器溜	土師器, 陶磁 器	埋99	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1995	総合人間学 A R 25区	238	伊藤古賀 淳史 秀策	事前発掘	2092	弥生土器棺墓, 古代溝, 土坑, 中世溝	弥生土器, 土師器, 陶磁器, 瓦	埋00	
1995	病院 A G 20区	239	千葉吉田 豊広	事前発掘	2260	縄文流路, 弥生流路, 中世井戸, 近世大溝	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 蓮月焼	埋00	
1995	病院 A F 20区	240	千葉吉田 豊広	事前発掘	280	近世池, 土坑	土師器, 陶磁器	埋00	
1995	本部 A X 26区	241	古賀吉田 秀策 豊広	事前発掘	627	中世大溝, 近世柵列	土師器, 陶磁器	埋99	
1996	医学部 A N 20区	248	五十川仲矢 古賀 秀策	事前発掘	510	縄文流路, 中世土取り穴, 近世井戸	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 陶磁器	埋00	
1996	総合人間学 A R 24区	249	伊藤富井 淳史 眞	事前発掘	330	中世掘立柱建物, 土坑, 溝	弥生土器, 土師器, 陶磁器, 銭貨	埋02	
1997	総合人間学 A R 23区	254	伊藤 淳史	立合		中世瓦溜	弥生土器, 土師器, 陶磁器, 瓦	埋02	弥生~中世包含層
1998	総合人間学 A N 22区	261	千葉古賀 豊 秀策 英毅 阪口	事前発掘	1800	縄文流路, 弥生方形周溝墓, 中世溝・土坑・土器溜・石室	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 陶磁器, 瓦	埋05	
1998	本部 A U 28区	262	伊藤富井 淳史 眞	事前発掘	543	中世土坑, 近世柱穴	土師器, 陶磁器, 瓦	埋02	
1998	総合人間学 A L 24区	264	古賀千葉 秀策 豊	立合			弥生土器, 土師器, 陶磁器	埋02	弥生~近世包含層
1999	病院 A F 20区	269	千葉阪口 豊 英毅 伊藤 淳史 眞	事前発掘	49	中世井戸, 土坑	縄文土器, 土師器, 陶磁器	埋03	
1999	医学部 A O 17区	270	伊藤富井 淳史 眞	事前発掘	2028	中世井戸, 集石, 土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器	埋03	
1999	本部 A W 26区	271	千葉阪口 豊 英毅	事前発掘	1913	古墳時代溝, 中世井戸, 瓦溜, 溝, 近世溝	縄文土器, 須惠器, 土師器, 瓦, 陶磁器	埋03	
1999	本部 A X 22区	272	富井 眞	立合		時期不明溝, 高野川系流路攻撃面		埋03	
2000	北部 B C 28区	276	伊藤富井 淳史 眞	事前発掘	2158	弥生水田, 中世溝, 近世井戸	縄文土器, 弥生土器, 石器, 陶磁器	埋05	
2000	本部 A T 21区	277	千葉阪口 豊 英毅	事前発掘	2654	終末期古墳周濠, 中近世白川道, 尾張藩邸水路・堀	縄文土器, 土師器, 陶磁器, 鉄鍋, 馬具, 銭貨	埋06	
2000	病院 A E 19区	278	千葉富井 豊 眞	事前発掘	8000	縄文流路, 古代土坑, 中世井戸, 近世井戸・土坑・池	縄文土器, 土師器, 近世陶磁器, 瓦	埋07, 千葉18, 笹川ほか21	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
2000	病院 A E18区	279	阪口 英毅	試掘	320	近世土坑	土師器, 陶磁器	埋05	近世包含層
2001	吉田南 A R24区	288	伊藤 淳史 梶原 義実	事前発掘	2375	奈良時代掘立柱建物, 平安時代経塚, 古代・中世溝, 柵	縄文土器, 弥生土器, 石器, 土師器, 陶磁器, 青銅製経筒, ガラス玉, 瓦	埋06	
2001	病院 A F12区	290	清水 千葉 芳裕 豊	立合		近世柱穴	土師器	埋06	
2001	病院 A F13区	291	清水 千葉 芳裕 豊	立合		近世柱穴	土師器, 陶磁器	埋06	
2001	本部 A T25区	293	清水 千葉 芳裕 豊	立合		近世尾張藩邸堀		埋06	
2002	本部 A U25区	296	伊藤 淳史 梶原 義実	事前発掘	1070	古代埋甕, 中世白川道・井戸, 近世集石	縄文土器, 土師器, 近世陶磁器・瓦	埋07	
2002	北部 B D28区	297	富井 眞崇 吉江	事前発掘	1925	縄文堅果集積・埋没林, 古代道路, 近世野壺	縄文土器, 弥生土器, 石器, 陶磁器	埋07	
2002	医学部 A R19区	298	千葉 豊 梶原 義実	事前発掘	1200	縄文流路, 中世道路・井戸, 近世土取り穴・野壺	縄文土器, 土師器, 陶磁器, 近世陶磁器	埋08	
2002	北部 B F32区	299	富井 眞崇 吉江	事前発掘	1900	縄文建物跡・焼土・土坑, 中世砂取り穴, 近世溝	縄文土器, 石器, 土師器, 陶磁器, 近世墓石	埋08	
2002	吉田南 A R25区	302	千葉 豊	立合		古代・中世・近世溝	土師器, 陶磁器, 中世瓦, 磁器, 将棋駒	埋07	
2003	医学部 A P18区	308	伊藤 淳史 吉江 崇	事前発掘	2125	中世道路・井戸・溝・集石・土器溜・野壺群, 近世井戸・溝	土師器, 瓦, 陶磁器, 石鍋, 近世陶磁器	埋08	
2003	北部 B D33区	311	富井 眞崇	立合		砂取り穴, 野壺		文09	中・近世包含層
2004	北部 B C30区	320	千葉 豊	事前発掘	85.5	古代土坑・溝, 中世土坑	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 陶磁器, 須恵器, 瓦器	文09	
2005	本部 B A22区	321	富井 眞崇 吉江	事前発掘	98	近世溝・瓦溜	縄文土器, 石器, 磁器, 近世陶磁器・瓦	文09	
2005	吉田南 A P21区	322	伊藤 淳史	事前発掘	48	古墳周溝, 古代土坑・溝, 中世土坑・集石	縄文土器, 土師器, 陶磁器, 須恵器, 瓦器, 轆羽口	文09	
2004	美山	323	清水 芳裕 伊藤 淳史	立合				文09	
2004	北部 B C35区	325	富井 眞崇 吉江	立合		古代道路?		文09	297地点の古代道路とつながるか

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
2005	本 部 A W24区	329	伊藤 淳史	立 合		近世白川道, 近世遺物溜, 煉瓦積水路	近世陶磁器	文09	縄文包含層
2005	北 部 B D30区	330	富井 眞	立 合			縄文土器	文09	中・近世包 含層
2005	本 部 A T22区	331	千葉 豊	立 合		近世白川道	近世陶器	文09	中世包含層
2006	本 部 A T26区	335	伊藤 淳史	立 合		近世尾張藩 邸堀	近世陶器	文09	
2006	本 部 A V24区	336	伊藤 淳史	立 合		中世白川道, 近世遺物溜	土師器, 近世 陶磁器・瓦	文09	
2001 ～ 2004	桂	337	千葉 豊	分 立 立 合		石垣	埴, 瓦	文09	
2007	病 院 A G16区	338	富井 眞 笹川 尚紀	事前発掘	3700	中世井戸, 近世井戸・ 集石・石垣	縄文土器, 土 師器, 陶磁器, 瓦	文10	
2007	病 院 A F14区	339	千葉 豊	事前発掘	712.6	中世道路・ 井戸・集石	縄文土器, 土 師器, 陶磁器	文10	
2007	和歌山県 瀬 戸	346	佐藤 純一	立 合		古代土坑	土師器	文10	古代包含層
2008	西 部 A W20区	348	伊藤 淳史 笹川 尚紀	事前発掘	2081	中世建物, 玉石集積, 井戸, 瓦溜, 土器溜, 流 路	土師器, 陶磁 器, 瓦, 玉石	文12	建物跡現地 保存
2008	病 院 A G13区	349	千葉 豊 富井 眞	事前発掘	2164	近世井戸・ 野壺・土坑・ 溝	近世陶磁器・ 土製品	文11	
2009	北 部 B H31区	355	富井 眞 笹川 尚紀	事前発掘	800	縄文加工樹 幹, 弥生土 器片敷, 中 世砂取り 穴・溝, 近 世溝	縄文土器, 弥 生土器, 石器, 土師器, 陶磁 器	文12	
2009	本 部 A Z23区	356	千葉 豊	事前発掘	710	縄文住居, 古墳周溝, 中世土坑	縄文土器, 石 器, 須恵器, 土師器	文12	AZ22区
2009	北 部 B G34区	357	千葉 豊 笹川 尚紀	事前発掘	1152	古代土坑, 中世砂取り 穴・道路・ 溝・野壺, 近世野壺	縄文土器, 石 器, 土師器, 黒色土器, 須 恵器, 緑釉陶 器, 灰釉陶器, 陶磁器, 瓦, 銭貨	文13	
2009	医 学 部 A Q18区	358	伊藤 淳史	事前発掘	824	中世井戸・ 道路・集石・ 土坑・溝・ 柱穴, 近世 集石・野壺・ 溝	土師器, 瓦器, 陶磁器	文13	
2010	病 院 A J16区	366	網 東 伸也 洋一	事前発掘	1085	中世土坑・ 溝, 近世畦・ 野壺・柵・ 土坑・溝	縄文土器, 弥 生土器, 土師 器, 須恵器, 瓦, 陶磁器	文13	
2010	吉 田 南 A L22区	367	笹川 尚紀	立 合		中世溝		文13	中世包含層
2010	本 部 A T25区	377	伊藤 淳史	立 合		尾張藩邸堀	須恵器, 陶器	文13	先史～近世 包含層

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
2011	吉田南AN21区	378	富井 眞 笹川 尚紀	事前発掘	1650	縄文土器破片集中部、弥生方形周溝墓、方形墳、中世溝・井戸・土坑・土器溜・陶器溜・埋甕・集石	弥生土器、古墳時代埴輪・須恵器・土師器、中世土師器・瓦器・須恵器・陶磁器・錢貨・瓦、近世陶磁器	文15	
2011	病院AH12区	379	千葉 豊	事前発掘	1700	近世道路・水路・井戸・溝	近世陶磁器・土師器・土製品	文14	
2011	本部AV27区	383	伊藤 淳史	立 合		白川道・尾張藩邸堀		文14	
2012	病院AH15区	384	伊藤 淳史	事前発掘	583	近世道路・水路・井戸	近世陶磁器・土師器、近代病院食器	文14	
2012	病院AF17区	385	富井 眞	事前発掘	4100	近世段差・溝・井戸・小穴	近世陶磁器・瓦	文15	
2012	北部BH38区	391	笹川 尚紀	立 合		溝ないしは土坑		文14	先史～中世包含層
2012	本部AT23区	395	千葉 豊	立 合		尾張藩邸堀	近世陶磁器	文14	
2013	本部AZ30区	397	笹川 尚紀	事前発掘	43	中世集石・溝、近世小穴	縄文土器、弥生土器、古代土師器・須恵器、中世陶器、近世陶磁器	文15	
2013	病院AH13区	398	千葉 豊	事前発掘	960	近世水路・道路・溝・小穴	近世陶磁器・土師器	文15	
2013	吉田南AM21区	399	伊藤 淳史 富井 眞 内記 眞理	事前発掘	923	弥生流路、平安溝、中世大溝・土取り穴・土器溜・瓦溜、近世野壺・溝・土取り穴・瓦溜	縄文土器、弥生土器、埴輪・古墳須恵器、古代土師器・須恵器、中世土師器・陶磁器・瓦・錢貨、近世土師器・陶磁器・瓦・西洋陶器	文16	
2013	医学部AO20区	400	伊藤 淳史	事前発掘	173	縄文流路、中世溝・井戸・集石・土器溜	縄文土器、中世土師器・陶器	文15	
2013	吉田南AM21区	401	伊藤 淳史 富井 眞 内記 眞理	事前発掘	945	縄文流路、弥生流路、古代溝・井戸、中世建物・溝・土取り穴・土器溜・集石、近世野壺・溝・土坑・土取り穴・集石	縄文土器、弥生土器、古墳須恵器、古代土師器・須恵器、中世土師器・陶磁器・瓦・錢貨、近世土師器・陶磁器・西洋陶器	文16	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
2013	北 部 B F 32区	402	千葉 豊	事前発掘	90	縄文土坑、 古代土坑	縄文土器・石 器、古代土師 器・須恵器・ 緑釉陶器	文16	
2013	本 部 A T 22区	403	笹川 尚紀	事前発掘	62	中世道路・ 井戸、近世 道路・溝	中世土師器・ 陶磁器・瓦・ 埴、近世陶磁 器・土師器	文16	AT21区
2013	本 部 A U 28区	404	千葉 豊 笹川 尚紀	事前発掘	815	中世溝・道 路・土坑・ 砂取り穴、 近世野壺・ 溝・集石	古代土師器・ 須恵器・緑釉 陶器、中世土 師器・陶器・ 瓦・埴、近世 土師器・陶磁 器・瓦	文16	
2013	北 部 B A 28区	405	千葉 豊	事前発掘	51	自然流路、 集石	近世陶磁器・ 土師器	文15	
2013	医 学 部 A L 17区	412	伊藤 淳史	立 合				文15	中近世包含層
2013	病 院 A I 12区	415	千葉 豊	立 合				文15	398地点の 近世道路・ 溝
2013	吉 田 南 A P 21区	416	伊藤 淳史	立 合		中世溝	中世土師器・ 陶器	文15	先史～中世 包含層
2013	病 院 A G 11区	419	伊藤 淳史	立 合				文15	近世包含層
2014	病 院 A I 15区	427	富井 眞 内記 理	事前発掘	2191	中世溝、近 世石垣・溝・ 土坑・井戸・ 集石・柱穴 列	先史石器、中 近世土師器・ 瓦器・陶磁器・ 瓦、近代陶磁 器	文17	
2014	吉 田 南 A P 23区	428	伊藤 淳史 笹川 尚紀	事前発掘	1470	弥生水田・ 流路、古代 土器溜・土 取り穴、中 世溝・井戸・ 土器溜・砂 取り穴、近 世路面・野 壺	縄文土器、弥 生土器、石器 、古代須恵器・ 土師器、中世 鉄鋤、中近世 土師器・陶磁 器、瓦	文17	
2015	熊 野 Z Z 18区	435	富井 眞 内記 理	事前発掘	1876	中世集石・ 瓦溜・土坑・ 井戸・土器 溜・柱穴・ 溝、近世溝・ 井戸・野壺・ 集石・瓦溜・ 路面・瓦積 み・埋納遺 構・土坑	縄文土器、古 代須恵器・土 師器・瓦、中 世土師器・陶 器・須恵器・ 瓦器・瓦・石 製品、近世陶 磁器・土師器・ 瓦・石製品	文19	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
2015	病院区 AH18区	436	千葉 豊 笹川 尚紀	事前発掘	480	中世土取り 穴、近世土 坑・土取り 穴・溝、近 代土坑・井 戸	縄文土器、古 代土師器・黒 色土器・須 恵器、中世 土師器・瓦 器・陶磁器 ・瓦、近 世土師器・ 陶磁器・土 製品・石製 品・瓦、近 代陶磁器・ 瓦	文18	AH17区
2015	北部 BJ37区	440	千葉 豊	立合			土師器・須 恵器	文17	古代・中世 包含層
2015	吉田南 AM22区	446	伊藤 淳史	立合				文17	中世包含層
2015	和歌山 瀬戸	447	佐藤 純一	試掘	4	時期不詳堆 積	土師器微小 片	文17	遺跡東限か
2016	北部 BC30区	450	伊藤 淳史 富井 眞	立合		古墳時代埴 輪溜・集石 ・落ち込み 、古代溝	縄文土器、古 墳時代埴輪 ・須恵器、古 代土師器・ 須恵器・瓦	文18	古墳存在の 可能性あり
2017	関田町 BB18区	454	千葉 豊 笹川 尚紀	試掘	5			文19	中世包含層
2017	関田町 BB18区	455	笹川 尚紀	事前発掘	920	中世溝・盛 土、近世流 路・井戸・ 野壺、近代 野壺・溝	中世土師器・ 陶磁器・石 仏、近世土 師器・陶磁 器・瓦、近 代陶磁器	遺20	
2017	西部 AZ20区	456	千葉 豊	試掘	10			文19	
2017	岡崎 ZS23区	457	伊藤 淳史 富井 眞	試掘	6		古代～中世 の瓦・土師 器	文19	古代～近世 包含層
2017	北部 BG36区	458	伊藤 淳史	立合		古代以前流 路、中世溝 ないし段差 、近世野壺	中世土師器	文19	
2017	本 部 AY29区	459	千葉 豊	立合		古代以前の 流路		文19	
2018	岡崎 ZS23区	463	伊藤 淳史 富井 眞	事前発掘		弥生～古墳 流路、古代 石敷土坑・ 瓦溜・井戸 、近世大溝 ・井戸	弥生土器、土 師器、古代～ 中世の瓦・土 師器・木製 品	遺20, 21	
2018	西部 AZ20区	465	千葉 豊	立合				遺20	456地点(試 掘)周辺
2018	熊野 ZZ16区	468	富井 眞 内記	立合				遺20	
2020	和歌山 瀬戸	487	伊藤 淳史 千葉 豊 富井 眞 内記	事前発掘	160		縄文土器、弥 生土器、土 師器、須恵 器、製塩土 器、黒色土 器、石器	遺22	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
2020	本 部 A X26区	488	千葉 豊 伊藤 淳史 富井 眞 笹川 尚紀 内記 理	試 掘	20	幕末尾張藩 邸濠	陶磁器, 土師 器	遺22, 内記 22	科学研究費 補助金による 学術調査
2020	本 部 A X30区	489	千葉 豊 伊藤 淳史 富井 眞 笹川 尚紀 内記 理	試 掘	7	中世路面	土師器	遺22, 内記 22	科学研究費 補助金による 学術調査
2020	本 部 A X29区	490	千葉 豊	立 合		中世・近世 路面, 近世 水路		遺22	
2020	本 部 A W23区	491	千葉 豊	立 合		煉瓦積水路		遺22	
2020	吉 田 南 A S23区	495	千葉 豊 富井 眞 笹川 尚紀 内記 理	立 合				遺22	中・近世包 含層
2020	医 学 部 A P18区	496	笹川 尚紀 内記 理	立 合				遺22	中・近世包 含層
2020	西 部 A Z20区	500	伊藤 淳史	立 合				遺22	近世包含層
2020	本 部 A Z22区	501	千葉 豊	立 合				遺22	黄色砂
2021	医 学 部 A M20区	505	内記 理 笹川 尚紀	事前発掘	1396	縄文流路, 中世井戸・ 土器溜・土 取り穴・集 石, 近世土 取り穴・溝, 近代井戸・ 溝・土坑	縄文土器, 弥 生土器, 古代 土師器・須恵 器, 中世土師 器・須恵器・ 陶器・瓦器・ 瓦・銭貨, 近 世陶磁器, 瓦	遺23, 第2 章	
2021	北 部 B G29区	506	千葉 豊	立 合				遺23	中・近世包 含層
2021	本 部 A T30区	507	伊藤 淳史	立 合			土師器	遺23	古代包含層
2021	本 部 A T26区	508	千葉 豊	立 合		黄色砂を切 る落ち込み		遺23	
2022	医 学 部 A M19区	512	内記 理	立 合				第1章	
2022	吉 田 南 A N21区	513	伊藤 淳史	立 合				第1章	
2022	北 部 B C33区	514	伊藤 淳史 富井 眞	立 合			古代土師器	第1章	
2023	病 院 A G11区	515	伊藤 淳史	事前発掘	195	近世溝・土 坑・野壺	近世土師器・ 陶磁器・土製 品	第3章	近世包含層
2023	北 部 B C28区	516	千葉 豊 伊藤 淳史 富井 眞 笹川 尚紀 内記 理	試 掘	10		古代～近世土 師器・陶磁器	第1章	科学研究費 補助金による 学術調査
2023	病 院 A F12区	517	伊藤 淳史	立 合				第1章	

報 告 書 抄 録

ふりがな	きょうとだいがくこうないせいせきちようさけんきゅうねんぼう2023ねんど							
書名	京都大学構内遺跡調査研究年報2023年度							
編著者名	千葉豊, 伊藤淳史, 笹川尚紀							
編集機関	京都大学大学院文学研究科附属 文化遺産学・人文知連携センター京大文化遺産調査活用部門							
所在地	〒606-8501 京都府京都市左京区吉田本町 TEL 075-753-7691							
発行年月日	2024年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査 期間	調査 面積㎡	調査原因
		市町村	番号					
医学部構内 AM20区	京都府京都市左京区 吉田橋町	26100	-	35° 01' 19"	135° 46' 41"	20211213 } 20220506	1396	がん免疫総合研究センター新営
病院構内 AG11区	京都府京都市左京区 聖護院川原町	26100	-	35° 01' 11"	135° 46' 25"	20231113 } 20231130	195	屋外排水施設新営
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
医学部構内 AM20区	散布地	縄文時代	自然流路		縄文土器			
	散布地	中世	井戸・土器溜・土取り 穴		土師器・瓦器・須恵器・ 陶器・白磁			
	散布地	近世前半	土取り穴・集石		古代土師器・須恵器, 中世土師器・須恵器・ 陶器・青磁・白磁・瓦・ 鋳型・ふいご羽口		土取り穴のなかから鋳造 にかかわる遺物が多数出 土。	
	耕作地	近世後半 ・近代	溝多数・井戸1・土坑 1		陶磁器・瓦・土製品		土地の区画を示す段差を 検出。	
病院構内 AG11区	散布地	近世後半 ・近代	溝多数・土坑多数・野 壺1		近世土師器・陶磁器・ 土製品		鴨川まで西へ150mの地 点。	

緯度・経度は世界測地系にもとづく

第Ⅱ部 京都大学大学院文学研究科附属
文化遺産学・人文知連携センター
京大文化遺産調査活用部門紀要Ⅴ

「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（下）

伊藤淳史

「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（下）

伊藤 淳史

- 1 はじめに－問題の所在と本稿の目的－
 - 2 対象資料の特徴
 - 3 資料認識の過程と問題の所在
 - 4 資料の集成と検討(1)－鴨東地域北半－
- 以上は（上）（『京都大学構内遺跡調査研究年報2021・2022年度』所収）に掲載

5 資料の集成と検討(2)－その他の地域－

前節までは、京都大学吉田キャンパス構内や岡崎地域といった鴨東地域北半で出土が報告されている資料101点を対象にして、資料の実査からの所見も交えつつ、基本的特徴や変遷などについて検討してきた。そしてそれらを、俗称の「塩壺」ではなく「厚手鉢形土器」と呼称していくことを提案した。ひきつづいて本節では、平安京域などその他の地域の資料について、報告文献をもとにしながら検討していく。

対象資料 検討済みの鴨東地域北半以外について、2021年度末までに刊行された関連報告書を悉皆的に精査したところ、106点の資料を抽出できた。これらを、「洛東（＝鴨東地域南半）・洛南」「洛北・京北辺」「京域」「嵯峨野」「宇治・八幡」「湖西」として大まかに地域区分しながら、一覧表として末尾にまとめた（表2）。平安京・中世京都における発掘調査において決して稀少な資料ではないことから、このほかにも見落としや未報告の資料があることは十分に承知しているが、それでも何らかの傾向をうかがうことはできよう。

出土点数の推移 まず、これら106点と、さきに（上）で検討した鴨東地域北半の101点とあわせて207点の全体について、資料が使われた期間を把握するべく、出土している遺構の時期を集計した（図17）。その結果によると、13世紀前葉以前となる遺構からの出土でなかば以上が占められている。その後減少しながらも、14世紀後葉までは出土がみられ、15世紀代になると確実な形での出土はみられなくなる⁽¹⁾。すなわち、平安後期に顕在化して以降、鎌倉前期をピークとしながら、室町前期ころまでの200年間程度使われ続けた器種、ということになる。

「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（下）

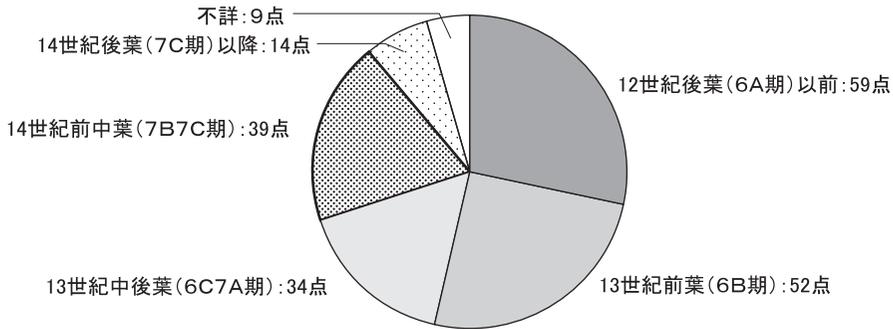


図17 対象資料207点が出土した遺構の時期

資料の空間分布 次に、上記資料の出土地点の分布について、全体の様相を概観しておく（図18）。京域（以下、旧平安京の範囲についてはこのように表記する）外の出土地は、図中に1～15で遺跡名を付した。

京域では、出土が報告されるのは左京域のみであり、平安後期以降中世にも利用され続けた空間であることを明らかに反映している。密に出土があるこの左京域と鴨東地域、それと、それより疎ではあるが複数例の出土が確認される隣接地の上京から洛北にかけて、および洛東（鴨東地域の南半）・洛南・嵯峨野といった地域が、基本的な分布圏と評価できよう。これら諸地域も、古代末から中世にかけて、京域と密接にかかわる諸層の離宮や邸宅、寺社などに活発に利用された空間である。この基本的な分布圏内では、さきに述べた平安後期～室町前期ころまでの期間、継続的に出土が確認されている。

遠隔での出土 一方で、やや離れた八幡、宇治、湖西といった地域では、のちに別途検討する宇治平等院境内遺跡を例外として、1遺跡1点程度の孤立散発的な出土が確認される。八幡市女郎花遺跡出土例（表2-198）、宇治市木幡所在の浄妙寺跡出土例（同199）は、ともに、12世紀後葉～13世紀前半ころに比定される土師器皿類などとともに遺構から出土している。大津市上仰木遺跡例は（同207）、包含層出土であるが、遺跡の主体は12世紀後半～13世紀にかけてであり、やはり同時期ころの製品と思われる。以上はいずれも鎌倉期までで、継続的で濃密な出土ではない。

八幡市女郎花遺跡は、古山陽道と東高野街道が交錯する交通上の要点に位置しており、また浄妙寺の位置する宇治市北部の木幡地域は、摂関家藤原氏一門と縁故の深い空間である。そして、大津市上仰木遺跡については、比叡山延暦寺と関連する富裕層の邸宅としての性格が示唆されている。つまり、厚手鉢形土器が京域で盛行する時期において、いずれ

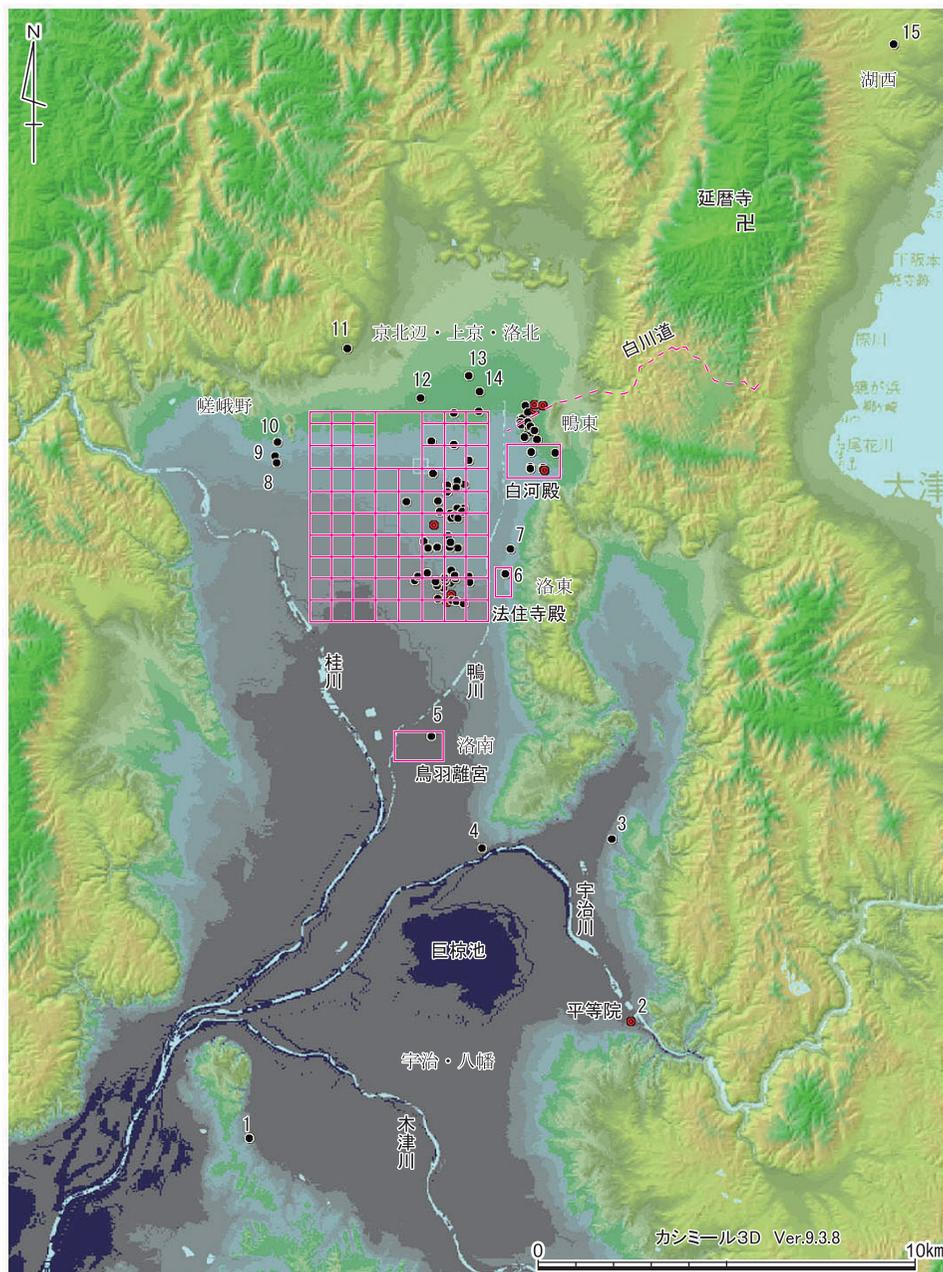


図18 対象資料の出土地点 (赤丸は5点以上の出土・縮尺1/20万)

- | | | | | |
|---------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 1 八幡市女郎花 | 2 宇治市平等院 | 3 宇治市浄妙寺 | 4 伏見区桃陵 | 5 南区鳥羽離宮 |
| 6 東山区法住寺殿 | 7 東山区六波羅政庁跡 | 8 右京区一ノ井 | 9 右京区常磐仲ノ町 | 10 右京区常盤東ノ町 |
| 11 北区鹿苑寺(金閣寺) | 12 上京区上京 | 13 上京区相国寺境内 | 14 上京区常磐井殿町 | 15 大津市上仰木 |

の遺跡も人の移動に伴う京からの製品の搬入が生じうる性格を帯びていると評価できる。これら遠隔地にわずかに点在する製品は、在地での生産品ではなく、何らかの事情で上述した基本的な分布圏から運ばれ使用されていたものと考えるのが自然であろう。属性の少ない土師器皿類よりも、製品の移動を直接的に示すマーカーとして見出しやすいとも言え、今後さらに範囲を広げて意識的に探索する必要性を指摘しておきたい。

そして、以上の、遠隔地をも含めた分布状況で興味深いのは、京城から西南方の洛西や乙訓地域へとひろがる傾向は確認されないことである。これらの地域が、京城で主流の土師器皿とは特徴の異なる「乙訓在地形」などと称される土師器皿の分布圏であることを考慮すると〔伊藤ほか2016 pp.84-87〕、特異な厚手鉢形土器の製作と使用は、京城で主流の土師器皿類と密接に関連していることが予測されよう。ただし、これらよりさらに遠隔地でありながら、京との密接な関係にあり関連遺物の出土も知られる平泉・鎌倉・福原といった地域での出土は、現状では把握できていない。

形態や特徴の変遷 それでは、以上の諸地域の資料を対象として、(上)において鴨東地域北半で行った作業と同様に、遺構内で共伴する土師器皿類を手がかりにして変遷を検討してみよう(図19・20)。以下、形態の分類は(上)を踏襲し、皿類の編年と暦年代観は〔平尾2019〕にしたがっている。

明確に定型化した出現が把握されるのは、鴨東地域北半と同様に6A期(12世紀後葉)である。A形態としたような、体部が直線的なバケツ形の器形が目立つ(図19-1・5等)。ほか、全形をとどめた資料にとぼしいが、体部が半ばで屈曲するB形態や、ゆるやかに外反するC形態とみるべきものも存在はしている(同8)。また、鳥羽離宮では三足付の製品が出土しており(同11)、(上)で紹介した白河街区での13世紀に下る出土例や、後述する左京四条一坊の資料(図20-84)の存在を考慮すると、こうした脚台が付される類型も存在したとみなして良からう。そして、この12世紀後葉の段階は、形態にかかわらず口縁部周辺の仕上げがヨコナデとともにしっかりと施され、端部が上方に肥厚するような特徴が顕著といえる。すでに鴨東地域北半の資料で指摘しているが、これは、皿類の口縁仕上げ手法と共通する特徴で、二段撫で手法の消滅過程で口唇部に内傾する外端面が形成される段階の特徴とされるものである。

以上は、つづく6B期(13世紀前葉)にかけては様相は継続しているが、6C期(13世紀中葉)以降になると、明確な変化が看取されるようになる。以後は総じて小型化の傾向が進行しており、バケツ形であったA形態では、口径・底径ともに縮小してコップ形と呼

ぶのがふさわしいほっそりとした形態へと移行している(図19-29・35)。B・C形態は、小ぶりになりつつも引き続き出現しているが(同40~42)、その後7B期(14世紀前葉)以降になると、目立たなくなる。14世紀代になると、各形態とも、口径が10cmに満たないようなミニチュア品が顕著に認められるようになっており(同47・51・64・73等)、あわせて、底部に穿孔があるものが確実に存在している(同55・70)。

小型化傾向の実相 こうした変化の方向性は、鴨東地域北半の資料からもすでに知られているところであるが、今回それ以外の地域の対象資料についてを付加して、あらためて時期別に口縁の法量分布を集計した(図21)。13世紀中葉以降の小型化傾向について、より明瞭に示されるとともに、口径が10cm以下のミニチュア品と呼び得るような製品については、14世紀代以降に、鴨東以外の地域で顕在化している傾向がうかがえた。もっとも、いずれの地域でも、小型品に収斂しているわけではなく、少量だが大型品も存在はし続けている。器形をとどめた状態での出土に恵まれなことを考慮すると、大型品は破片化して報告に漏れ、本来はもう少し存在していたと見ておくべきかもしれない。

これらが消滅するのは、さきにも述べたように遺構からの出土がほとんど認められなくなる15世紀とみられるが、8B期すなわち14世紀後葉頃に比定される遺構出土資料でみると、底径が小さく口縁部側へ大きく開くコップ型器形と(図20-73)、体部が直線的な筒状に近い器形(同78)の、大別すると2種類の形態へ収斂しながら衰退していった様相がうかがえる。また、稀少な製品ではあるが、脚付の大型品も鴨東地域北半と同様に存在していたことがわかる(同84)。この左京四条一坊跡の土坑SK12出土と報告される例は、外面に粘土紐積み上げ痕を明瞭にとどめる脚付(残存しているのは三脚)の鉢で、口径30cm超の大型品である〔平安京調査会1975 図版66-E526〕。出土遺構は戦国時代の長方形土坑で、その上層の焼土層から出土し、火災後の廃棄による埋め立てによるものとされている〔前掲書 p.15〕。しかし、特徴からみて鳥羽離宮出土品(図19-11)などの三脚付資料に類する厚手鉢形土器であり、同じ調査で大量に出土している平安後期~室町期の資料が混入した可能性が高いのではないかと考えている。

平等院庭園出土資料の位置づけ さて、以上のなかで、基本的な分布圏から外れながら7点が出土して特異さが際立っている宇治市平等院出土資料について、位置づけを再検証しておきたい。これらは、庭園整備事業12次調査阿字池西岸P-7区砂層下層出土資料の中に含まれる一群(図22-1254~1260)で、創建期(11世紀中葉)近い時期の遺物と報告されている〔宗教法人平等院2003 p.85〕。この位置づけが確かならば、100年以上製品

「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（下）

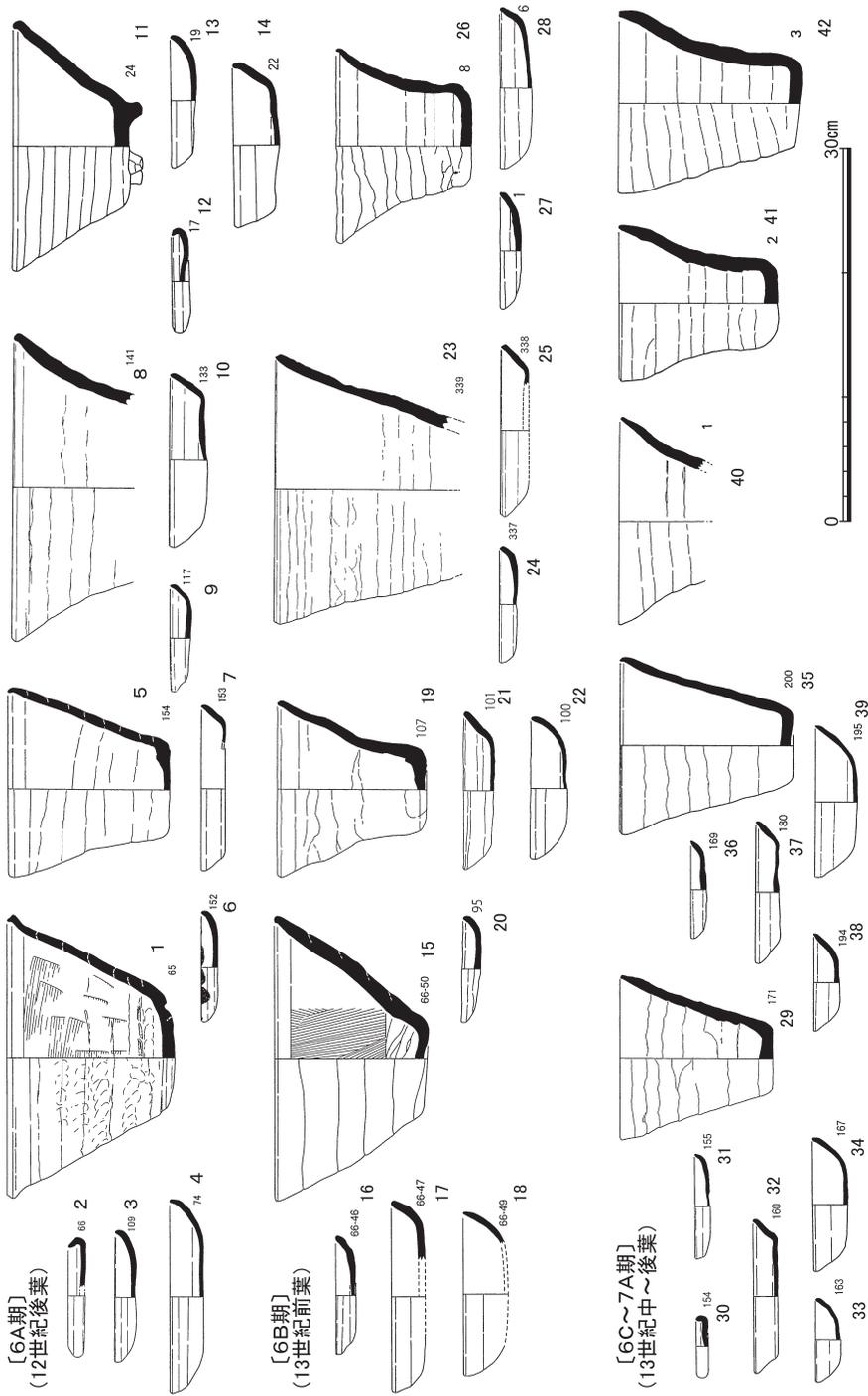
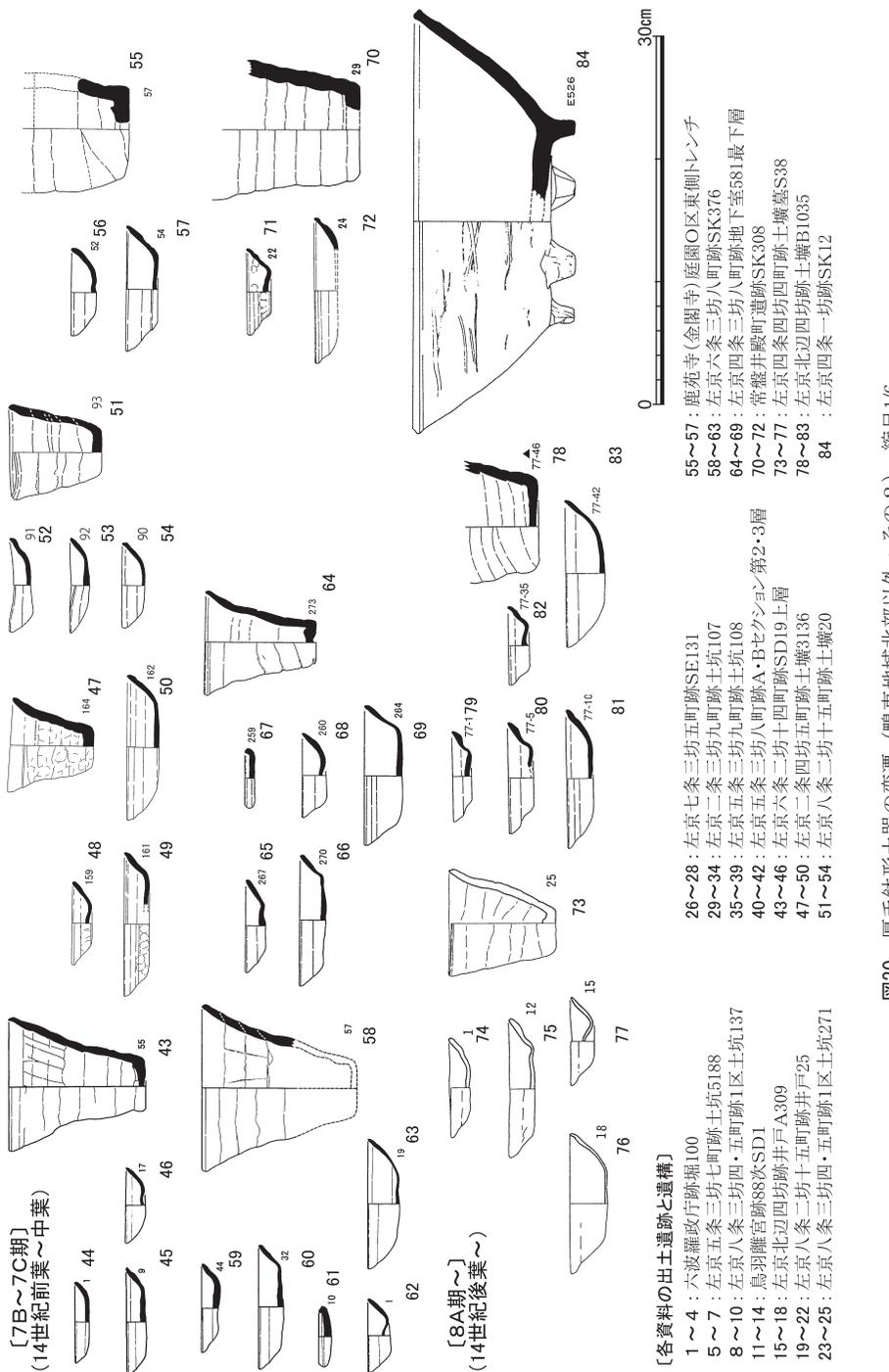


図19 厚手鉢形土器の変遷（鴨東地域北部以外・その1） 縮尺1/6



[7B~7C期]
(14世紀前葉~中葉)

[8A期~]
(14世紀後葉~)

[各資料の出土遺跡と遺構]

- 1~4 : 六波羅政行跡掘100
- 5~7 : 左京五条三坊七町跡土坑5188
- 8~10 : 左京八条三坊四・五町跡1区土坑137
- 11~14 : 鳥羽離宮跡88次SD1
- 15~18 : 左京北辺四坊跡井戸A309
- 19~22 : 左京八条二坊十五町跡井戸25
- 23~25 : 左京八条三坊四・五町跡1区土坑271
- 26~28 : 左京七条三坊五町跡SE131
- 29~34 : 左京二条三坊九町跡土坑107
- 35~39 : 左京五条三坊九町跡土坑108
- 40~42 : 左京五条三坊八町跡A・Bセグション第2・3層
- 43~46 : 左京六条二坊十四町跡SD19上層
- 47~50 : 左京二条四坊五町跡土坑3136
- 51~54 : 左京八条二坊十五町跡土坑20
- 55~57 : 鹿苑寺(金園寺)庭園O区東側トレンチ
- 58~63 : 左京六条三坊八町跡SK376
- 64~69 : 左京四條三坊八町跡地下至58L最下層
- 70~72 : 常盤井殿町遺跡SK308
- 73~77 : 左京四條四坊四町跡土坑墓S38
- 78~83 : 左京北辺四坊跡土坑B1035
- 84 : 左京四條一坊跡SK12

図20 厚手鉢形土器の変遷 (鴨東地域北部以外・その2) 縮尺1/6

製品の系譜と機能について

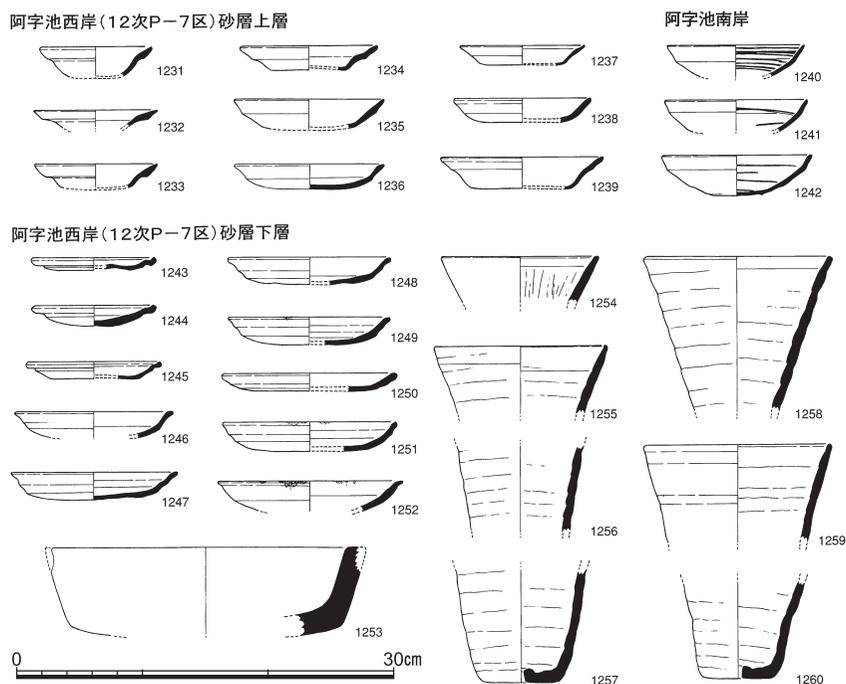


図22 平等院庭園阿字池西岸出土資料（『平等院庭園保存整備報告書』2003より縮小転載）縮尺1/6

ものを含む内容と言っても差し支えない。したがって、下層出土とされる厚手鉢形土器1254～1260が、特徴からみて11世紀代とは位置づけがたいことの原因として、上層出土と認定すべき資料の混入によるものと判断しておきたい。結果、以下に述べていく系譜をめぐる議論の対象としてはとりあげないことになる。

6 製品の系譜と機能について

确实なところでは12世紀後葉に定型化したものが突然出現しているかのように思われる厚手鉢形土器だが、どのような技術系譜から出現しているのだろうか。この製品が担った機能についての問題とあわせて、最後に推察をめぐらしておくことにしたい。

先行時期の類似資料 粘土紐の積み上げ痕が顕著に残される厚手の鉢形土器、という特徴の類似に注目すると、11世紀代にすでに存在は認めることができる。

なかでも注目されるのは、三条西殿跡（平安京左京三条三坊十二町）A3土壙3出土資料である〔(財)古代学協会1983 第84図〕。この遺構からは、「て」字状口縁の皿と2段撫で手法の皿とが共存して出土しており（図23-1～6）、11世紀中葉の4B段階ころに

「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（下）

比定できる。当該の資料（同1）は、全形は不明であるが、「復元口径24.2cmの大形の鉢形土器で、粘土紐巻き上げ痕が明瞭に認められ、胴部外面は指オサエ」と報告されている。さらにこの資料は、図面上で見る限りは、口縁は短く外反して端部を上方につまみあげられるように仕上げており、平安中期頃までの「て」字状土師器皿や甕の口縁端部に顕著にみられる特徴を継承しているもの、とみることができる。出現期の厚手鉢形土器の口縁端部についても、こうした短い外反とつまみ上げがされる傾向が明瞭であり（例えば図19-1など）、このような特徴の類似からも系譜的な関連がうかがわれよう。

このほかには、器形としては異なるが、平安京左京六条三坊五町で平安後期の楊梅小路南側溝とされる溝3250から出土している三足付の鉢が、注意される（図23-7）。内面は丁寧なナデ調整で火を受けた形跡があり、外面に粘土紐を巻き上げた痕跡がみられるという〔(財)京都市埋蔵文化財研究所2005 p.55〕。厚手鉢形土器にも足付の類型が存在することから、この資料も系譜的に関連する祖型となりうるものとみたい。なお、報告書ではより古い段階の資料と位置づけているが、同遺構出土土師器皿の主体（同8・9）が示すような、11世紀代に帰属する資料であっても良いと思われる。

また、これらより遡る10世紀代においても、粘土紐積み上げ痕が顕著とみられる土師器鉢そのものは、左京北辺四坊土壙B1013で報告されている（図23-10・11）。〔(財)京都市埋蔵文化財研究所2004 図版53〕ただし、やや小ぶりで口縁端部を丸く収めて仕上げており、時期的にも開きがあることもあって、直接的な関連を指摘するにはいささか躊躇さ

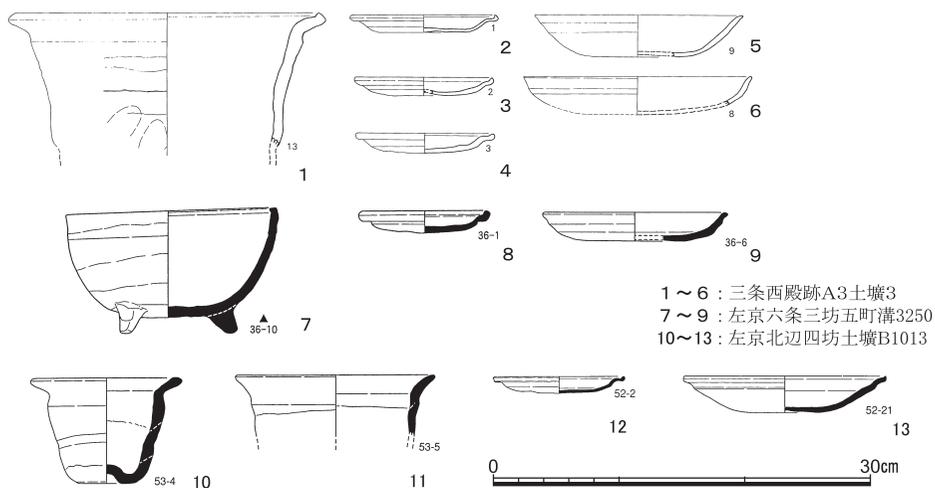


図23 先行する時期の遺構出土類似資料 縮尺1/6

れる製品ともいえる⁽²⁾。

製作技術の系譜と出現の背景 いずれにしろ、上記したような事例は10～11世紀代にほとんど類例を認めないイレギュラーな存在であり、器種として定型化したものとなっていない。厚手鉢形土器につながり得るような属性をもった先行時期の資料ではあるが、連続的なつながりを示すことはできず、出現する契機となった資料の候補として挙げ得るにとどまる。

そもそも、これらがイレギュラーな存在と見做されるのは、11世紀代までの鉢や甕の器形が古墳時代以来の丸底を基本としていることによる。そしてそれらは基本的に煮炊具であって、叩き成型と刷毛・削り等の調整による薄い器壁であることが一般的である。したがって、こうした製作技術の系譜からは厚手鉢形土器は生じ得ず、強度のある平らな底部に、杯や皿とは異なる厚手の器壁を高く積み上げていくためには、異なる系譜からの技術の流用や試行錯誤があったことも十分に推測されよう。

それを示唆する痕跡が、古い段階の底部を中心に多く認められている、丸みを帯びた形状や輪状の圧痕といえよう（図24-1）。鴨東地域での観察所見は、さきに（上）において底部の輪状圧痕諸例として提示し検討を加えたところであるが、凹形の型枠状のものをを用いた底部の成型が想定できるような、丸底傾向の底部が確実に存在している。

ここで想起されるのが、時期は遡るものの、8～9世紀にかけて都城とその周辺で盛行する墨書人面土器に特有な製作技術である〔上村1992〕。これらは祭祀専用の甕形の容器であるが、凹形の外型を用いたとみられる底部と胴部との境界に明瞭な段が形成されてお



図24 厚手鉢形土器底部の輪状圧痕（左）と人面墨書土器底部の凹形成型痕（右） 約1/2

1：京都大学本部構内出土〔古賀1999 II110〕伊藤撮影

2：長岡京左京六・七条三坊出土〔(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998〕

(公財)京都市埋蔵文化財研究所画像データベース（長岡京東南境界祭祀遺跡出土遺物43）の画像を京都市文化財保護課の許可を得て使用

り（図24-2）、厚手鉢形土器底部にみられる輪状の圧痕（同1）ときわめて類似している。また胴部の外面についても粘土紐や粘土板を巻き上げた接合痕がそのまま残されているなど、一般の土師器甕とは異なる特徴をもつ〔前掲上村1992 第3図〕。いささか時間の隔たりはあるものの、これら諸特徴の厚手鉢形土器との共通性は注意されるのであり、平安京周辺の土師器製作集団に残されてきた製作の記憶が、技術的系譜の源流となり援用された可能性を、指摘しておきたい。

もっとも、厚手鉢形土器は、口縁端部は一段撫で面取り手法で仕上げるなど、同時期の土師器皿類と共通する技法が採用されていることも、既に鴨東地域で確認したところである。つまり、その製作は、基本的に京域や鴨東で使用される土師器皿類と同じ製作集団が担ったものと考えられる。はたして上記のような製作の記憶がそこに受け継がれてきたものなのか、状況に応じて独自に創意工夫した産物なのか、あるいは、煮炊具や祭具の製作集団が別に並存していたとして、そちらから援用するといった状況であったのか、現状では情報不足で全く決めがたいのが現実である。古代から中世にかけての土師器生産体制の変化を探るひとつのよすがとして、今後の継続的な検討課題である。

機能・用途の問題　すでに（上）において、観察可能な京都大学構内出土の資料にみられる使用の痕跡を検証し、著しい被熱は確認されないことと、少数だが内面に油煙や煤の付着する事例があることを指摘し、少なくとも製塩土器では無いものと述べてきた。今回の（下）において把握した資料については実見による検証を果たせていないけれども、特定の使用痕跡が報告で言及される事例はほとんどみられず、状況は変わらないと判断して良いと考える。そして、底部に焼成前や焼成後に穿孔する例が、14世紀以降を中心に一定数存在することも、把握出来た。京都大学構内出土の資料の場合は12世紀後葉の焼成後穿孔で、油煙痕の付着をともなっていたことから、灯火具としての転用の可能性に言及した。今回あらたに把握した底部穿孔例も、容器内面の様子は詳らかで無いが、同種の用途で用いられた可能性は十分に考えられよう。いずれにしろ製塩や焼塩の容器としては用を為さなかったことは明白である。

このようにみえてくると、厚手鉢形土器の本来的な用途としては、一部は灯火具として利用・転用されたとしても、曲物内にそれを仕掛けて火桶として用いる火容製品であった、とする梅川光隆の想定が〔梅川2001 p.122〕、きわめて蓋然性の高いものと思われる。曲物が火桶としても使用されていることは、絵巻物の表現からかねてより認識されてきた〔南1982 第7図1〕。しかし、何らかの容器を内部に仕込んだ二重構造である表現がさ

まとめと課題

れていながら、内容器に該当する製品については、梅川の指摘まで誰も言及してこなかった。口縁の内面に煤状の付着物が少なからず確認されることや、口縁部の周辺については内外とも器表面を平滑に仕上げていること（一方で、直接視認されることのないそれ以外の部分はほぼ未調整で、粘土紐積み上げ痕等がそのまま残されること）は、そのような使用法を想定すると、すぐれて腑に落ちる特徴といえる。

こうした土製火容製品の成立事情として梅川は、「中世都市民（一般都市民）が自立した家を営むものとして新興した」ことを背景に、狭い空間の最大限の活用にとって、手軽に設備や撤去できる利点を持った置き炉の普及、部品としての土製火容の需要が促されたものと推察している〔梅川前掲書 p.148〕。背景事情についてはさらに論証を深める必要があるが、機能的な要求として手軽さがあったとするならば、時間的な変化の方向性として小型化の傾向が明瞭であることは、きわめて整合的である。また、同時期にもっとも普遍的であった土師器皿類の製作集団がその生産と流通を担い、出土する空間からは特定階層との相関は見出しがたいことも、製品の役割を考慮すると納得されよう。そして、最終的に、同種の機能を担う大和産火鉢の普及とともに姿を消すのである。

7 まとめと課題

本稿では、平安後期～鎌倉時代を中心とする時期の京都市域周辺で出土し、俗に「塩壺」と呼ばれてきた鉢形の土師器を検討対象とし、(上)(下)に分割して記述してきた。先行研究のみられない資料であることから、まずは基礎作業として実態把握を最大の目的として設定したが、結果として207例の報告(2022年3月末まで)を把握し、それらに基づいた資料の特徴抽出と時間的変遷の想定とともに、機能や系譜についても不十分ながら推論を及ぼすことができた。その際には、製塩土器との外見上の類似に由来する「塩壺」の俗称について、その用途を示す証拠は確認出来ないことから、今後は「厚手鉢形土器」と呼称することを提起した。以下、論じた要点3つを簡潔にまとめる。

1. 資料の空間分布は、濃密な出土がある平安京の左京域と鴨東地域北半と、複数例の出土がみられる隣接周辺地域を基本的な分布圏として認定できる。ほか、宇治・八幡・湖西の遠隔で散発的出土を確認するが、洛西や乙訓といった西方では出土せず、京域主流土師器の分布域との相関が注意される。

2. 時間的変遷については、12世紀後葉には明確に定型化して出現しており、14世紀代以降は出土量が減少し、15世紀代には消滅している。時期を追って口径・底径とも小型化

「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（下）

する傾向があり、直線的なバケツ形からコップ形へと推移している。また後半期にはミニチュア製品も顕在化する。

3. 機能や系譜については、内面に油煙痕や煤付着がみられたり、底部に穿孔する例が少数ながらあることから、製塩や焼塩の容器ではなく、灯火器として転用を一部には含みつつ、梅川光隆が想定するような屋内置き炉用の火容の蓋然性が高いと推断した。またその製作技術は、京域や鴨東で主流の土師器皿製作集団が担いながら、平底の鉢形器形の創出にあたっては、痕跡の類似から、墨書人面土器底部における凹型成型などと関連する可能性について言及した。

（上）においては、京都大学構内出土資料が多くを占める鴨東地域北半の資料を対象としており、実査により器表面の状況や痕跡を観察した所見を反映させている。しかし、その他の地域を対象とした（下）では、資料の実見を果たせていないため、とくに3の機能や製作技術の系譜にかかわる議論は、想定の外を出ていない。今後それらを果たして、資料からの実証にもとづく議論へと高めていくことが、課題となる。

また、機能や系譜に関連する問題として、同時期に同じ機能を担う大型の火容製品として挙げられている瓦質の盤との関連については、今回全く対象外としている。今後は、それらも含めて総合的な検討をおこなうことで、住空間の変容をはじめとする古代から中世にかけての都市化の実相を解明することへつなげたい。

謝 辞 新田和央氏（京都市文化財保護課）には、湖西地域における資料所在をはじめ、種々の教示を得た。末尾ながら御礼申し上げたい。

〔注〕

- （1）戦国時代の遺構からの出土と報告される左京四条一坊跡の例については〔平安京調査会1975 図版66－E526〕（表2－131）、後述しているように、平安後期～室町期のものが混入したと見なす。また、左京八条一坊十六町跡において17世紀と報告される落込み165出土の例も〔京都市埋蔵文化財研究所2014 図30－137〕（表2－155）、示された特徴で見限り近世の焼塩壺ではなく中世の厚手鉢形土器の小形品であり、同じ遺構から出土している鎌倉後期の資料群と同時期に比定すべきものと考えている。
- （2）左京九条三坊九町跡 SD1750の最下層の灰粘層では、10世紀第1四半期ごろとされる黒色土器とともに「外面に粘土紐接合痕を多く残す粗製の鉢」「内面に被熱痕が残る」資料の出土が報告されている〔（公財）元興寺文化財研究所2019 p.68, 図51－207〕（表2－195）。特徴から12～13世紀の厚手鉢形土器そのものとみられ、出土状況の検証が必要とおもわれることから、祖型的な事例の対象としては取り上げていない。

参 考 文 献

〔引用・参考文献〕

- 伊藤淳史・富井眞・内記理 2016年 「京都大学吉田南構内AM21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2014年度』
- 上村和直 1992年 「人面土器製作技術の検討」『長岡京古文化論叢』Ⅱ
- 梅川光隆 2001年 『平安京の器 その様式と色彩の文化史』
- (公財)元興寺文化財研究所 2019年 『平安京左京九条三坊九町跡・烏丸町遺跡』
- (財)京都市埋蔵文化財研究所 1998年 『水垂遺跡 長岡京左京六・七条三坊』(京都市埋蔵文化財研究所調査報告第17冊)
- (財)京都市埋蔵文化財研究所 2004年 『平安京左京北辺四坊一第1分冊(公家町形成前)一』(京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊)
- (財)京都市埋蔵文化財研究所 2005年 『平安京左京六条三坊五町跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-8)
- (公財)京都市埋蔵文化財研究所 2014年 『平安京左京八条一坊十六町跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2013-16)
- (財)古代学協会 1983年 『三条西殿跡』(平安京跡研究調査報告第7輯)
- 宗教法人平等院 2003年 『平等院庭園保存整備報告書』
- 平尾政幸 2019年 「土師器再考」『洛史』((公財)京都市埋蔵文化財研究所研究紀要第12号)
- 平安京調査会 1975年 『平安京跡発掘調査報告一左京四条一坊一』
- 南 博史 1982年 「絵巻物による曲物の一考察」『平安博物館研究紀要』第7輯

本稿は、2022～2024年度科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号22K00985「『都市化』とは何かー歴史都市京都近郊における長期的検証ー」(研究代表者・伊藤淳史)にかかると研究成果である。

「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（下）

表2 鴨東地域北半における厚手鉢形土器報告資料一覧

洛東・洛南地区									
遺跡名	遺構層位	挿図	報告番号	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	時期	文献	特徴備考
102	六波羅政庁跡	堀100	32	65	22	8.8	13.3	5B	1 図19-1
103	法住寺殿跡・ 六波羅政庁跡	井戸4-250	図版30	280	17.6			7A	2
104	鳥羽離宮跡	SD1	図版45	24	19.2	8	9.2	6A	3 三足付 / 図19-11
105	桃陵	溝119	28	42	12.9			7A	4
京北辺・上京地区									
遺跡名	遺構層位	挿図	報告番号	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	時期	文献	特徴備考
106	相国寺境内	ESX601	16	24	10.5			7A	5
107	常磐井殿町	SK306下層	図版7	87		4.5		7B	6
108	常磐井殿町	SK308	図版8	29		6.9		8B	6 底部穿孔 / 図20-70
109	上京	土坑268	27	38	20.4			6A	7
110	北辺三坊五町 内膳町	SD353	50		16			7B	8
111	北辺四坊	井戸A309	図版66	66-50	22	6.8	12	6A	9 図19-15
112	北辺四坊	土壇B1035	図版77	77-46		6.8		8B	9 図20-78
113	北辺四坊	土壇B1037	図版69	69-39				7A	9
洛北・嵯峨野地区									
遺跡名	遺構層位	挿図	報告番号	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	時期	文献	特徴備考
114	鹿苑寺 (金閣寺)	○区東側トレン チ	33	57		7.5		7B	10 底部穿孔 / 図20-55
115	常磐東ノ町 古墳群		13	11	18	6	12.8	6B	11
116	常磐仲ノ町	土坑286	49	106	10			7B	12
117	一ノ井	井戸195	18	52	15.2			7A	13
平安京左京域1（四条まで） ※左京一条二坊十二町→一・二・十二のように略記									
遺跡名	遺構層位	挿図	報告番号	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	時期	文献	特徴備考
118	一・二・十二	中世包含層	15	86	13.2			8B	14
119	二・三・九	土壇107	34	171	12.8	4.8		7A	15 図19-29
120	二・四・五	土壇3136	37	164	7.5	3	9.6	7B	16 図20-47
121	三・二・十	土壇1200	図版49	560	12.5			7C	17
122	三・三・十一	土壇14	83	33	11.6			7C	18
123	三・三・十二	A3土壇3	84	13	24.2			4A	19 三条西殿跡 / 図23-1
124	三・三・四	SX30	17	179	7.2		7.2	7A	20
125	三・四・四	SK51下層	22	540		5.2		7A	21
126	四・三・八	地下室581上層	34	240		4		7C	22
127	四・三・八	地下室581最下	34	273	8	3.2	8.4	7C	22 図20-64
128	四・二・十四	SK2253	66	528		4.3		7A	23
129	四・四・四	土坑墓S380	24	25	8.4	3.2	8.4	7C	24 図20-73
130	四・三・十二	SE435	41	285	12.2			7B	24
131	四・一	SK12	図版66	E526	32.8	12	12.8		26 四脚付? / 図20-84 時期・出土状況要検討

表 2

平安京左京域2 (五条～八条)										
遺跡名	遺構層位	挿図	報告番号	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	時期	文献	特徴備考	
132	五・二・十六	土坑30	28	5	21.6		6A	27		
133	五・三・八	A・Bセクション 第2・3層	65	1	16.4		6C	28	図19-40	
134	五・三・八	A・Bセクション 第2・3層	65	2	12	4	12.4	6C	28	図19-41
135	五・三・八	A・Bセクション 第2・3層	65	3	14	6	14	6C	28	図19-42
136	五・三・十六	土坑212	34	241		3.8		7C	29	
137	五・三・九	土坑108	47	200	13.6	5	13.8	7A	30 図19-35	
138	五・三・七	土坑5188	45	154	14.4	5.6	12.8	6B	31 図19-5	
139	五・二・十一	地下室2123	29	100	16.2			7A	32	
140	五・二・十一	地下室2123	29	101		7		7A	32	
141	五・二・十一	地下室2123	29	102	18.6			7A	32	
142	五・二・十一	地下室2123	29	103	16.6			7A	32	
143	五・二・十一	地下室2123	29	104	18.4			7A	32	
144	五・二・十一	土坑墓2216	32	237	14.5			7A	32	
145	五・三・十五	No.47土坑32	15	18	12	4	10.8	7A?	33 地下鉄烏丸線	
146	六・三・八	SK376	附図 30-1	57	14			7C	34 図20-58	
147	六・三・七	土坑 S239	73	1	12	5.4	10.8	7A	35	
148	六・三・十三	No.55土坑12	52	No.55-16	17.4	5.1	9.9	6A	36 地下鉄烏丸線 三脚内面被熱 / 図23-7	
149	六・三・五	溝3250	図版36	36-10	17		10	4A?	37	
150	六・二・十四	SE140	38	138		6.2		6C	38 全面被熱	
151	六・二・十四	SD19上層	116	55	10.4	4	10.8	7C	39 図20-43	
152	六・二・二	不明	7	11	13.2	4	13.2		40 詳細不明	
153	七・三・五	SE131	25	8	16	6	10.7	6B	41 東本願寺 / 図19-26	
154	七・二・五	土坑612	13	204	13.8			6B	42 龍谷大学大宮	
155	八・一・十六	落込み165	30	137	8.8	5.2	8.8	7C?	43 遺構は近世	
156	八・一・十六	SD175	図版30	89	13.2			7A	44	
157	八・二・九	土坑 S2146	30	10	16.4			6A	45	
158	八・二・九	墓 S81	35	1	15.6			7C	45	
159	八・二・九	墓 S81	35	2		4.8		7C	45	
160	八・二・十五	井戸25	図版 8	107	13.6	4.8	12	6C	46 図19-19	
161	八・二・十五	土壇20	図版 8	93	6.8	2.8	7.2	7C	46 図20-51	
162	八・二・十五	包含層	17	150	6.8	2.4	6.8	7C	46	
163	八・三・三	埋甕土壇273	58	17	14.1			6A	47	
164	八・三・三	埋甕土壇273	表 3						47 体部のみ	
165	八・三・二	G27P18	49	17	12			7A?	48	
166	八・三・二	G27P18	49	18	16	6	12.8	7A?	48	
167	八・三・二	G27P18	49	19	14.8	4.2	14.4	7A?	48	
168	八・四・七	SK216	13	69	12.8			6C	49	
169	八・三・一	井戸399	11	146	18.2	7.2	16.9	7C	50 東本願寺前古墓群	
170	八・三・九	土坑115	23	141		6		6C	51	
171	八・三・九	SK330	61	700	13	4.8	12.7	7B	52 東本願寺前古墓群	
172	八・三・九	SK740・741	63	791		5		7B	52 東本願寺前古墓群	
173	八・三・九	SE971	69	973		5.2		7C	52 東本願寺前古墓群	

「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（下）

平安京左京域3（八条～九条）

遺跡名	遺構層位	挿図	報告番号	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	時期	文献	特徴備考
176	八・三・七	SK107	21	496		2	7C?	53	
177	八・三・七	SK458	21	497		5.6	7C?	53	
178	八・四・一	土坑3724	図版132	503	7.2		7B	54	
179	八・四・一	土坑3724	図版132	504		3.2	7B	54	
180	八・三・四五	1区土坑137	図版57	141	24.6	9.65	6A	55	図19-8
181	八・三・四五	1区土坑86	図版58	203	23	9.8	6B	55	
182	八・三・四五	1区土坑86	図版58	204	26.6	9	6B	55	
183	八・三・四五	1区土坑271	図版59	339	21.6		6B	55	図19-23
184	八・三・四五	1区土坑108	図版61	477	25	10.3	6C	55	
185	八・三・四五	1区土坑108	図版61	478	26	7.4	6C	55	
186	九・二・十六	整地層	24	17	12		6A?	56	
187	九・二・十六	整地層	24	18	20		6A?	56	
188	九・三・九	不明	9	51	15.2	7.2 8.8	6A?	57	出土状況不明
189	九・三・九	不明	9	52	15.2	6.4 8.8	6A?	57	出土状況不明
190	九・三・九	不明	9	53	16	6 10.4	6A?	57	出土状況不明
191	九・三・九	不明	9	54	16.8	6 9.6	6A?	57	出土状況不明
192	九・三・九	不明	9	55	16.8	6 10.4	6A?	57	出土状況不明
193	九・三・九	不明	10	62	10		6A?	57	出土状況不明
194	九・三・八	整地層	14	49		4.3	6B?	58	
195	九・三・九	SD1750灰粘	51	207	20		6A?	59	時期・出土状況要検討
196	九・三・九	SD0430上層	80	233	16.8		6A	59	
197	九・四・二	土坑3060	16	66	17.2	6.8 13.6	6A	60	

京都市外（八幡・宇治・湖西地区）

遺跡名	遺構層位	挿図	報告番号	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	時期	文献	特徴備考
198	女郎花 (第8次)	C区北池状遺構 SG27上層	24	16	16.6		6A	61	
199	浄妙寺跡	SK40101	PL.18	80	20.4		6B	62	
200	平等院境内	阿字池西岸12次 P-7区砂層	図版100	1254	12		8A?	63	時期・出土状況要検討 (図22)
201	平等院境内	阿字池西岸12次 P-7区砂層	図版100	1255	13.2		8A?	63	時期・出土状況要検討 (図22)
202	平等院境内	阿字池西岸12次 P-7区砂層	図版100	1256			8A?	63	時期・出土状況要検討 (図22)
203	平等院境内	阿字池西岸12次 P-7区砂層	図版100	1257		5.6	8A?	63	時期・出土状況要検討 (図22)
204	平等院境内	阿字池西岸12次 P-7区砂層	図版100	1258	14		8A?	63	時期・出土状況要検討 (図22)
205	平等院境内	阿字池西岸12次 P-7区砂層	図版100	1259	14		8A?	63	時期・出土状況要検討 (図22)
206	平等院境内	阿字池西岸12次 P-7区砂層	図版100	1260		4.2	8A?	63	時期・出土状況要検討 (図22)
207	上仰木	包含層	図版52	449	19.2		6A	64	

*口径・底径・器高は基本的に報告書の挿図より計測したが、観察表に記載のあるものはその数値を採用した。

*時期は、出土遺構の共伴土師器皿類等を〔平尾2019〕により比定した。

報告文献

報告文献（番号は表2と対応）

- 1 (株)文化財サービス2019『六波羅政庁跡、音羽・五条坂竊跡発掘調査報告書』
- 2 (財)京都市埋蔵文化財研究所2009『京都国立博物館構内発掘調査報告書—法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡—』(京都市埋蔵文化財研究所調査報告第23冊)
- 3 吉崎伸・鈴木久男1985「23第88次調査」(財)京都市埋蔵文化財研究所『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』
- 4 (財)京都市埋蔵文化財研究所2015『伏見城跡・桃陵遺跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-2)
- 5 大本山相国寺承天閣美術館1984『大本山相国寺境内の発掘調査—承天閣地点の埋蔵文化財—』
- 6 同志社大校地学術調査委員会1978『常磐井殿町遺跡発掘調査概報』
- 7 (財)京都市埋蔵文化財研究所2011『上京遺跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2011-2)
- 8 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター1988『京都府遺跡調査概報第27冊』
- 9 (財)京都市埋蔵文化財研究所2004『平安京左京北辺四坊—第1分冊(公家町形成前)』(京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊)
- 10 (財)京都市埋蔵文化財研究所1997『特別史跡特別名勝鹿苑寺(金閣寺)庭園』(京都市埋蔵文化財研究所調査報告第15冊)
- 11 (財)京都市埋蔵文化財研究所1977『常磐東ノ町古墳群』(京都市埋蔵文化財研究所調査報告第1冊)
- 12 (財)京都市埋蔵文化財研究所2011『常磐仲ノ町遺跡・常磐東ノ町古墳群』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-15)
- 13 (株)文化財サービス2021『一ノ井遺跡発掘調査報告書』(文化財サービス発掘調査報告書第18集)
- 14 (財)京都市埋蔵文化財研究所2004『平安京左京一条二坊十二町跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-18)
- 15 古代文化調査会2016『平安京左京二条三坊九町・旧二条城跡・烏丸丸太町遺跡—大門町の調査—』
- 16 (株)イビソク関西支店2014『平安京左京二条四坊五町跡・烏丸丸太町遺跡』(イビソク京都市内遺跡調査報告第7輯)
- 17 (財)京都市埋蔵文化財研究所2008『平安京左京三条二坊十町(堀河院)跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-17)
- 18 (財)古代学協会1984『押小路殿跡・平安京左京三条三坊十一町跡』(平安京跡研究調査報告第12輯)
- 19 (財)古代学協会1983『三条西殿跡』(平安京跡研究調査報告第7輯)
- 20 京都市文化市民局2020「II—1 平安京左京三条三坊四町跡・烏丸御池遺跡」『京都市遺跡試掘調査報告令和元年度』
- 21 (財)京都市埋蔵文化財研究所2003『平安京左京三条四坊四町跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-10)
- 22 (財)京都市埋蔵文化財研究所2013『平安京左京四条三坊八町跡・烏丸御池遺跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2013-2)
- 23 (財)京都市埋蔵文化財研究所2003『平安京左京四条二坊十四町跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-5)
- 24 京都府京都文化博物館1993『平安京左京四条四坊四町跡』(京都文化博物館調査研究報告第9集)
- 25 (財)京都市埋蔵文化財研究所2007『平安京左京四条三坊十二町跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-26)
- 26 平安京調査会1975『平安京跡発掘調査報告—左京四条一坊—』
- 27 京都府京都文化博物館1991『平安京左京五条二坊十六町』(京都文化博物館調査研究報告第6集)
- 28 (財)古代学協会1997『平安京左京五条三坊八町発掘調査報告』(平安京跡研究調査報告第19輯)
- 29 (財)京都市埋蔵文化財研究所2013『平安京左京五条三坊十六町跡・烏丸綾小路遺跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-21)
- 30 (財)京都市埋蔵文化財研究所2008『平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-10)
- 31 (株)イビソク関西支店2017『平安京左京五条三坊七町跡・烏丸綾小路遺跡—白樂天町集合住宅建設に伴う埋蔵文化財研究所発掘調査報告書—』(イビソク京都市内遺跡調査報告第15輯)
- 32 (財)京都市埋蔵文化財研究所2017『平安京左京五条二坊十一町跡・烏丸綾小路遺跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-8)
- 33 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会1976『烏丸線内遺跡調査抄報』Vol.14
- 34 平尾政幸2019「土師器再考」『洛史』((公財)京都市埋蔵文化財研究所研究紀要)第12号
- 35 京都府京都文化博物館1995『平安京左京六条三坊七町』(京都文化博物館調査研究報告第11集)
- 36 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会1981『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報II』本文編

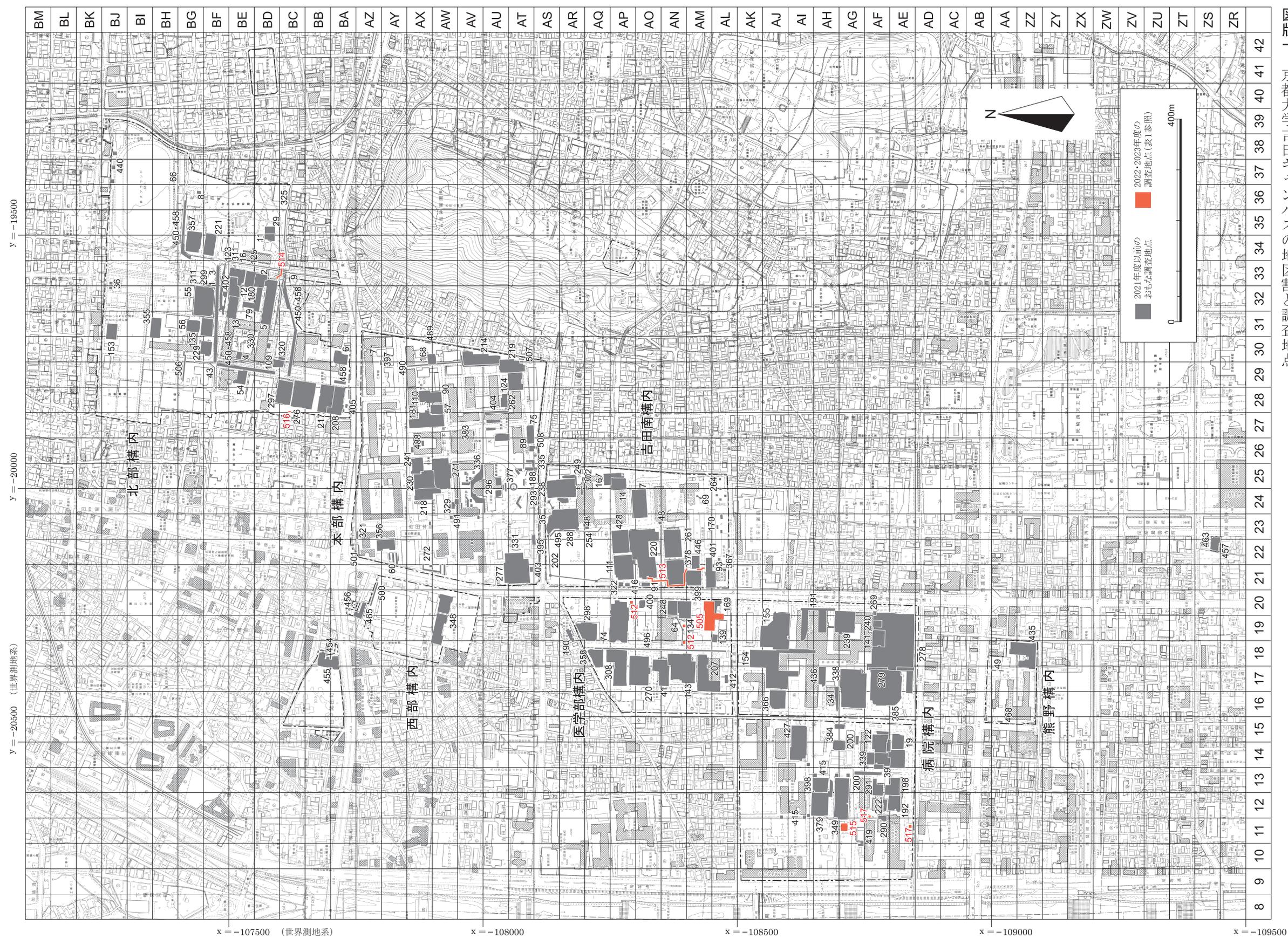
「塩壺」と俗称されている鉢形製品の検討（下）

- 37 (財) 京都市埋蔵文化財研究所2005『平安京左京六条三坊五町跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-8)
- 38 (財) 元興寺文化財研究所2017『平安京左京六条二坊十四町跡・烏丸綾小路遺跡』
- 39 (財) 京都市埋蔵文化財研究所2012「25平安京左京六条二坊十四町跡・猪熊殿跡・本國寺跡」『昭和54年度京都市埋蔵文化財調査概要』
- 40 (財) 古代學協會2008「平安京左京六条二坊二町馬淵診療所新築工事に伴う調査」『平安京左京内5遺跡』(平安京跡研究調査報告第23輯)
- 41 (財) 古代學協會1985『平安京左京七条三坊五町』(平安京跡研究調査報告第15輯)
- 42 龍谷大学2018『平安京左京七条二坊五町(東市跡)発掘調査報告書』
- 43 (公財) 京都市埋蔵文化財研究所2014『平安京左京八条一坊十六町跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2013-16)
- 44 関西文化財調査会2004『平安京左京八条一坊十六町』
- 45 京都平安文化財2020『平安京左京八条二坊九町』(京都平安文化財発掘調査報告第7集)
- 46 (株) 日開調査設計コンサルタント2007『平安京左京八条二坊十五町』((株) 日開調査設計コンサルタント文化財調査報告書第1集)
- 47 上村憲章1999「8平安京左京八条三坊1」(財)京都市埋蔵文化財研究所『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』
- 48 (財) 古代學協會1983『平安京左京八条三坊二町』(平安京跡研究調査報告第6輯)
- 49 (財) 京都市埋蔵文化財研究所2004『平安京左京八条四坊七町跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-11)
- 50 (公財) 京都市埋蔵文化財研究所2020『平安京左京八条三坊一町跡・東本願寺前古墓群』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2019-10)
- 51 (財) 京都市埋蔵文化財研究所2010『平安京左京八条三坊九町跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-6)
- 52 (公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター2017『平安京跡・東本願寺前古墓群』(京都府遺跡調査報告書第169冊)
- 53 (財) 京都市埋蔵文化財研究所1982『平安京左京八条三坊』(京都市埋蔵文化財研究所調査報告第6冊)
- 54 (公財) 京都市埋蔵文化財研究所2019『平安京左京八条四坊一町跡・御土居跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2018-13)
- 55 (財) 京都市埋蔵文化財研究所2009『平安京左京八条三坊四・五町跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-7)
- 56 (公財) 京都市埋蔵文化財研究所2015『平安京左京九条二坊十六町跡・御土居跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014-9)
- 57 堀内明博・江谷寛2008「平安京左京九条三坊九町跡三越ユニティ用地」(財) 古代學協會『平安京左京内5遺跡』(平安京跡研究調査報告第23輯)
- 58 (公財) 京都市埋蔵文化財研究所2021『平安京左京九条三坊八町跡・烏丸町遺跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2020-7)
- 59 (公財) 元興寺文化財研究所2019『平安京左京九条三坊九町跡・烏丸町遺跡』
- 60 (株) イビソク2019『平安京左京九条四坊二町跡・烏丸町遺跡』(イビソク京都市内遺跡調査報告第21輯)
- 61 八幡市教育委員会2007『女郎花遺跡(第8次)発掘調査報告書—八幡大芝53-1他宅地造成に伴う調査—』
- 62 宇治市教育委員会2004『浄妙寺跡発掘調査報告書』(宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書第87集)
- 63 宗教法人平等院2003『史跡及び名勝平等院庭園保存整備報告書』
- 64 大津市教育委員会2013『上仰木遺跡発掘調査報告書』(大津市埋蔵文化財調査報告書65)

京都大学構内遺跡調査研究年報 2023年度

目 次

- 1 京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点
- 2～3 京都大学医学部構内AM20区の発掘調査
- 4～5 京都大学病院構内AG11区の発掘調査



y = -195000

y = -200000

y = -205000 (世界測地系)

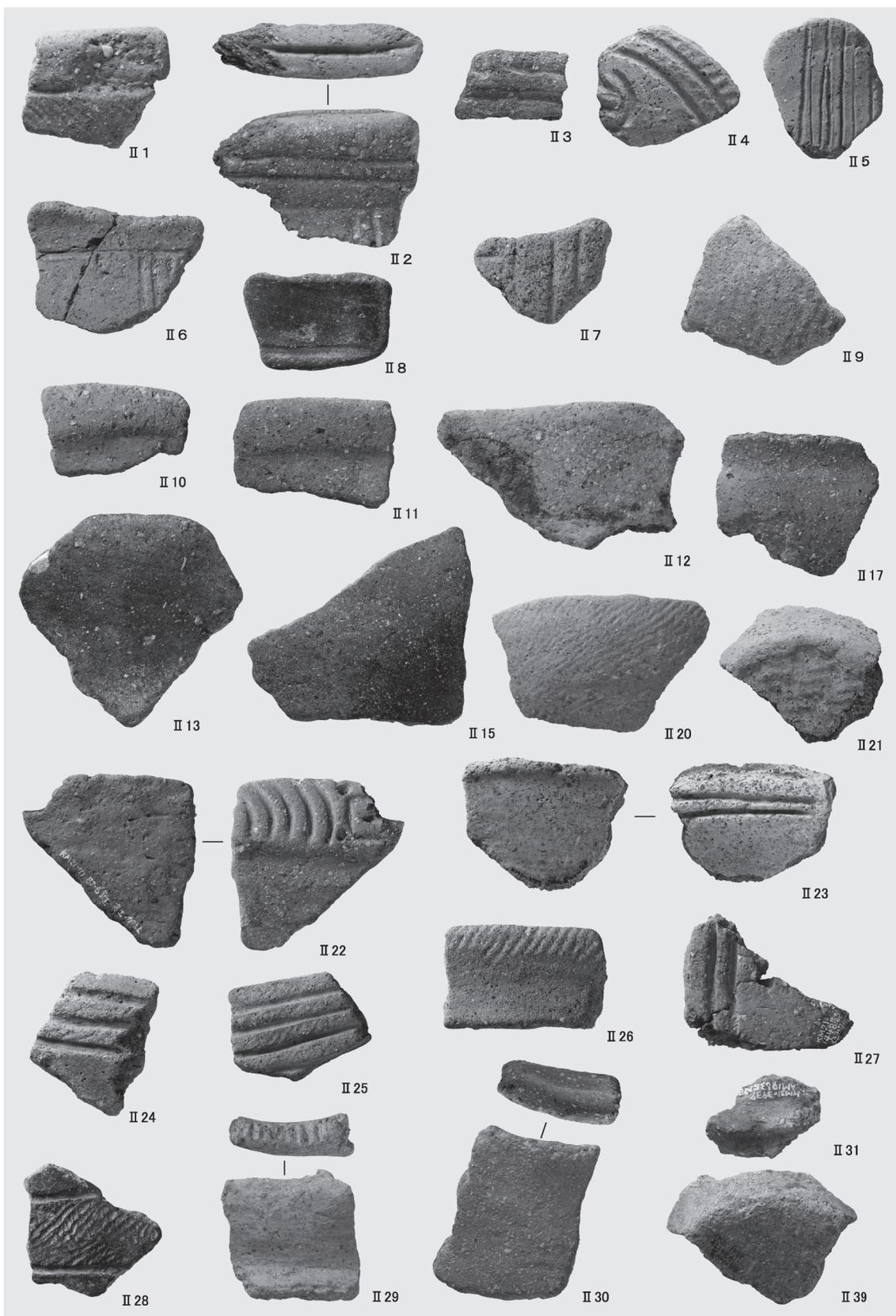
x = -107500 (世界測地系)

x = -108000

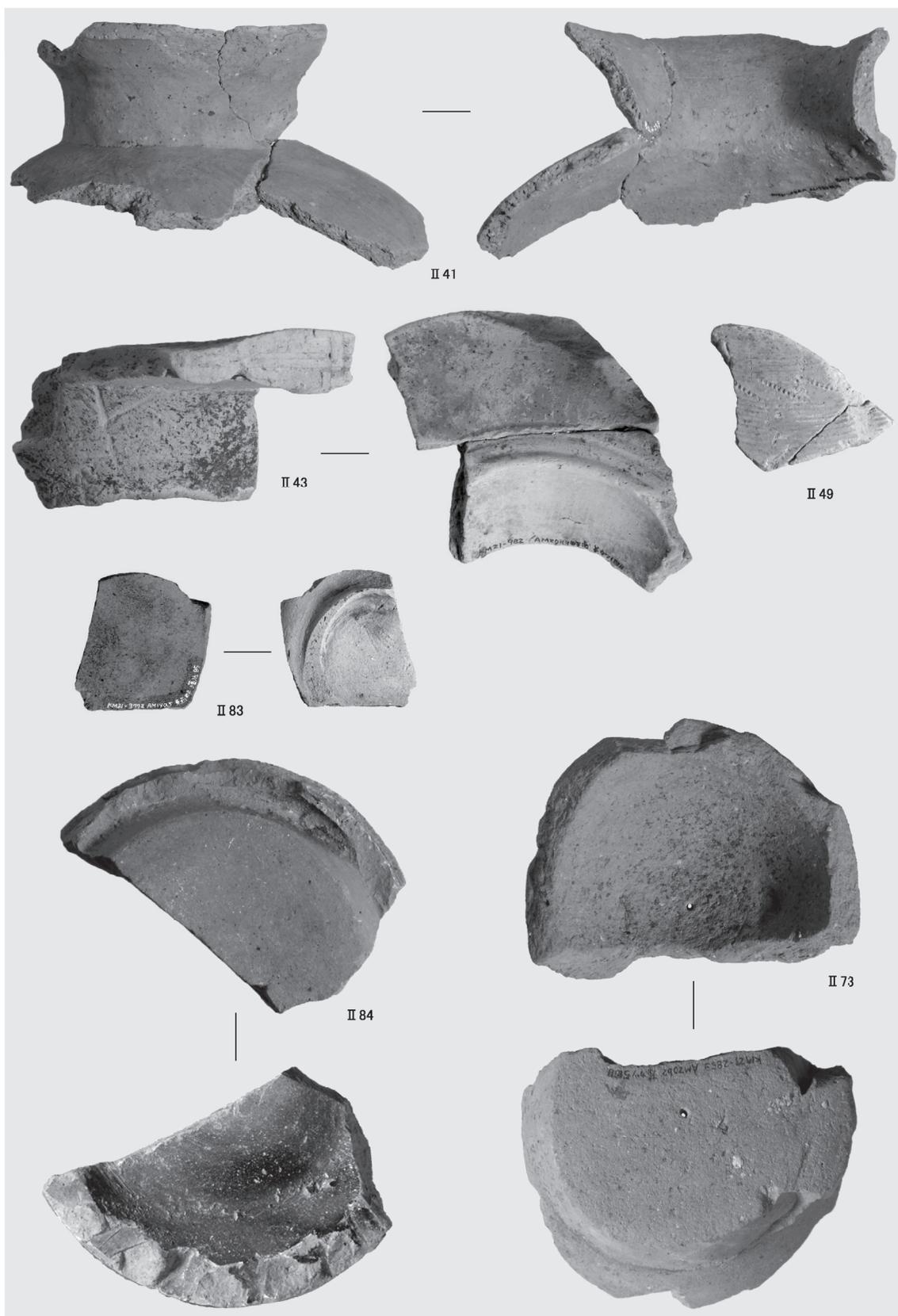
x = -108500

x = -109000

x = -109500



縄文土器



弥生土器 (II 41・II 43・II 49), 須恵器 (II 73・II 83・II 84)



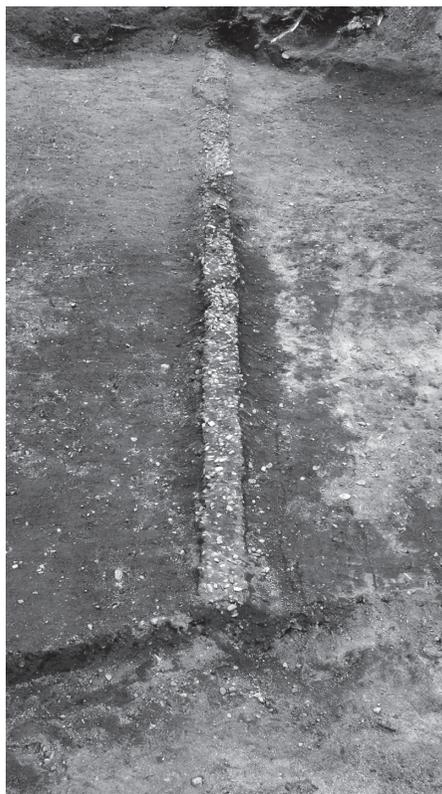
1 表土除去後全景（東から）



2 黒褐色土除去後全景（東から）



1 淡褐色土除去後全景（東から）



2 集石 S X 1 検出（南から）



3 調査区東北角砂礫層落ち込み確認状況

2024年3月31日 発行

京都大学構内遺跡調査研究年報
2023年度

編集 京都大学大学院文学研究科附属
発行 文化遺産学・人文知連携センター
京大文化遺産調査活用部門
京都市左京区吉田本町

印刷 三星商事印刷株式会社
製本 京都市中京区新町通竹屋町下ル弁財天町300